

## CAN-DOリストの活用を通じた外国語科指導法に関する研究 —小中高接続の視点から—

本研究では、小学校、中学校及び高等学校の新学習指導要領の趣旨を踏まえ、学校段階間の学習到達目標のつながりを考えた外国語科指導法の在り方について検討した。また、各学習段階における学習到達目標を示した CAN-DO リストの活用を通して指導と評価の改善に取り組んだ。その結果、CAN-DO リストを活用することで、生徒の英語学習への意識を高めたり、英語によるコミュニケーション能力を向上させたりする成果が検証された。本稿では、外国語科指導における学校段階間の連携や学びの接続に向けた取組の成果と課題を報告する。

＜検索用キーワード＞ CAN-DO リスト 新学習指導要領 外国語科 小中高接続  
学習到達目標 5領域 「授業の手引 高等学校英語」

### 研究協議会委員

稲沢市立大里東小学校教諭	鈴木 啓太（平成29年度）
東浦町立西部中学校教諭	尾崎 利奈（平成29年度）
県立惟信高等学校教諭	北川 博丈（平成28,29年度）
県立高蔵寺高等学校教諭	堀場 雅博（平成28,29年度）
県立一宮興道高等学校教諭	武田 邦生（平成28年度）
県立常滑高等学校教諭	田中 恵美（平成29年度）
県立豊野高等学校教諭	清水 雅史（平成28,29年度）
県立加茂丘高等学校教諭	小笠原詠子（平成28,29年度）
県立豊丘高等学校教諭	白井 敬子（平成28年度）
県立豊橋商業高等学校教諭	木下 裕美（平成28,29年度）
総合教育センター研究指導主事（現県立旭丘高等学校教頭）	関 友彦（平成28年度）
総合教育センター研究指導主事	田口 英樹（平成29年度）
総合教育センター研究指導主事	広瀬八重子（平成28,29年度主務者）

### 1 はじめに

小学校、中学校の新学習指導要領解説（文部科学省、平成29年6月）において、小学校中学年では、年間35時間の外国語活動で「聞くこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」を、さらに高学年では、年間70時間の外国語科で「読むこと」「書くこと」も扱うことが示された。また、中学校外国語科では、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」とされ、高等学校の外国語科指導との接続が求められている。小・中学校の外国語科の目標は、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、各学校段階の学びを接続させるとともに、「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にするという観点から改善・充実が図られている。また、小・中・高等学校で一貫した目標を実現するため、国際的な基準などを参考に、「聞くこと」「読むこと」「話すこと（やり取り）」「話すこと（発表）」「書くこと」の五つの領域で目標が定められ、

小学校3年生の外国語活動から、中学校の外国語科まで領域ごとの目標が一覧で示されている。一方、各学校が設定すべき学習到達目標について、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」（中央教育審議会，平成28年12月）では、次のように記されている。

- 各学校においては、国が外国語の学習指導要領に定める領域別の目標を踏まえ、更に具体的に各校の学習到達目標を設定する。その際、個別の知識がどれだけ身に付くかに主眼を置くのではなく、「知識・技能」を外国語による実際のコミュニケーションにおいて活用し、外国語で情報や自分の考えなどを表現し伝え合うことで、「思考力・判断力・表現力等」について外国語教育の資質・能力の育成が図られるよう、学習内容等を設定することが求められる。
- 各学校の学習到達目標は、学習指導要領上の目標等に基づいて児童生徒が身に付けることが期待される資質・能力に関する目標である。児童生徒の学習状況や地域の実態等を踏まえた上で、卒業時の学習到達目標を、「～することができる」という形で設定し、指導の改善などに活用することが想定されている。

各学校において、児童生徒の卒業までを見通し、いつ、どの領域のどの目標を、どのような言語活動を通して達成するかを考え、学習到達目標に基づく年間学習指導計画及び単元計画を作成することが求められる。外国語の授業を通じて「どのような力を身に付けるか」ということを、児童生徒や保護者とも共有し、目標の到達度を適切に把握するための評価の改善も必要となる。

現在、中学校・高等学校に対して、「英語を使って何ができるようになるか」を『CAN-DO リスト』の形式での学習到達目標」として具体的に設定・公表し、達成状況を把握することが求められており、その実施状況は、次のとおりである（表1）。

【表1 平成28年度英語教育実施状況調査（文部科学省，平成28年12月）から抜粋】

評価項目	中学校（全国 / 愛知県注1）	高等学校（全国 / 愛知県）
「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を設定している学校（学科）	75.2 % / 37.8 %	88.1 % / 98.5 %
「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を公表している学校（学科）	12.0 % / 4.9 %	28.4 % / 10.9 %
「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標の達成状況を把握している学校（学科）	34.2 % / 16.8 %	41.6 % / 40.3 %

注1）中学校（愛知県）は、名古屋市を除く

愛知県では、平成28年度までに全ての県立高等学校で、「CAN-DO リスト」形式の学習到達目標を設定しているが、同形式の学習到達目標の公表（「学校だより」で紹介したり、学校のホームページに掲載したりなどすることで、生徒、保護者及び地域住民に広く伝えていること）や、同形式の学習到達目標の達成状況の把握（テスト等の実施により、設定した学習到達目標の達成状況を客観的に把握している状態）の二つの項目は、全国平均を下回る結果となっている。

愛知県教育委員会が作成した、「愛知県英語教育改善プラン」（平成28年）では、表1の全ての評価項目における平成29年度の目標指針を、中学校・高等学校ともに100%とし、「CAN-DO リスト」形式での学習到達目標の設定の促進による、指導と評価の改善を求めている。

本研究では、こうした状況を踏まえ、CAN-DO リストの活用を通じた英語の指導と評価の改善に取り組み、その効果を検証することとした。

## 2 研究の目的

当センターの教育研究調査事業の一つである「教科指導の充実に関する研究（英語）」では、平成

28年度まで、高等学校における英語教育の当面する課題について調査研究を進め、生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成をねらいとする指導法及び評価法の開発に取り組んできた。その成果を踏まえ、本年度は、小・中・高等学校の研究協力委員による研究を行い、英語教育における学校段階間の連携や学びの接続への指針について広く発信し、各学校段階における指導と評価の改善に資する。なお、当センターにおける過去10年の英語教育に関する研究主題は表2のとおりである。

【表2 過去10年の英語教育に関する研究主題（愛知県総合教育センター『研究紀要』）】

年度	研究主題	研究紀要
平成20・21年度	小中連携による外国語活動の在り方に関する研究	第98・99集
平成24年度	コミュニケーション能力を育成する外国語科指導の在り方に関する研究 －単元構想の工夫と言語活動の充実－	第102集
平成26年度	外国語（英語）科における言語活動中心の単元構想と評価の在り方に関する研究	第104集

### 3 研究の方法

#### (1) 小・中・高等学校の外国語科指導における連携・接続についての実態把握

研究協力委員が各地区（稲沢市，知多地区，豊田市藤岡地区，豊橋市）の小中高連携協議会等で収集した学校段階間の連携・接続に関する情報について協議を行い、課題解決の方策を探る。

中学校・高等学校間における外国語科指導の接続に関しては、「高等学校新入学生徒の学力に関する研究」（愛知県総合教育センター）の調査結果の経年比較（p.4 表3）や、同研究で提案された指導例を参考に指導上の課題と解決法について検討し、授業実践に生かす。

#### (2) 学校段階間の学びの接続を目指した指導の実践（小・中・高等学校）及び研究協議

各研究協力委員の授業実践及び研究協議を通して、新学習指導要領も見据え、学校段階間での学習到達目標や学習内容のつながりを考えた指導の在り方について検討し、外国語科指導における連携や学びの接続への指針を示す。また、所員による授業参観を行い、その内容を研究協議に生かす。

#### (3) CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価の実践（高等学校）及び研究協議

各学習段階における学習到達目標を示した、CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価に関する実践について協議を行い、生徒の英語学習への意識の変化や、英語によるコミュニケーション能力の変容を検証する。また、「CAN-DOリストの活用に関するアンケート」（p.5 資料1）の結果や、平成28年度の「教科指導の充実に関する研究（英語）」で作成した研修用教材「授業の手引 高等学校英語」の実践例を踏まえ、各校におけるCAN-DOリストの効果的な活用法について検討を重ね、指導と評価における課題と解決法を探るための一助とする。

### 4 研究の内容

#### (1) 小・中・高等学校の外国語科指導における連携・接続について

##### ア 先進的な取組と共通する課題について

研究協力委員が収集した情報に基づき、各地区における先進的な取組と共通する課題等について協議を行い、各校での実践を通して、課題解決に向けた指針を提案することとした。

##### 【先進的な取組】

- ・ 異校種間での授業交流や情報交換を行っている（知多地区，豊田市藤岡地区，豊橋市 他）。
- ・ 小中高の連携事業として、中学生対象のイングリッシュ・キャンプの運営に高校生が協力

したり、小学生対象の出前授業で、高校生が講師を務めたりしている（知多地区）。

- ・ 中学生対象のイングリッシュ・キャンプ（市主催）に、高校生がボランティアとして参加している（豊橋市）。
- ・ 英語科教員を対象に「英語教育に関するアンケート（意識調査）」を行っている（豊橋市）。
- ・ 高等学校第1学年のCAN-DOリストの能力記述文を見直す際に、地域の中学校の指導内容や学習到達目標についての情報、中学校の教員からの助言を参考にしている（知多地区）。
- ・ 全ての中学校がCAN-DOリストを作成し、活用を目指している（豊橋市）。
- ・ 地域の中学校と高等学校が合同でCAN-DOリストを作成し、活用を目指している（豊田市藤岡地区）。

### 【共通する課題】

- ・ 小学校の担任とALTとのティーム・ティーチングの方法や、外国語（英語）の免許をもたない教員による外国語指導法
- ・ 小学校外国語科における評価方法
- ・ 小・中学校の外国語指導の接続や学校種間の観点別評価の接続
- ・ 高等学校における、CAN-DOリストの活用や、パフォーマンス評価の方法
- イ 外国語科指導における中高連携・接続の課題について

当センターでは、愛知県高等学校英語教育研究会と共同で、参加を希望する愛知県内の国・公・私立高等学校の新入学生徒を対象に、高等学校新入学生徒学力調査を実施し、その調査結果及び分析内容を、「愛知県総合教育センター研究紀要別冊」という報告書にまとめている。そこで、この報告書を外国語科指導における中学校・高等学校間の連携・接続に向けた参考資料として用いた。

この報告書に示された「抽出答案（各校受検者の10%）による設問別正答率の推移」は表3のとおりである。年度により出題内容や難易度が異なるため、単純な比較は難しいが、複数の年度で、語彙や表現の知識を活用すること（設問【2】【4】【6】）を苦手とする傾向が、高等学校入学時に見られることが指摘されてきた。

【表3 抽出答案（各校受検者の10%）による設問別正答率の推移】

年度	21年度	22年度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度
抽出人数（人）	3, 252	3, 158	3, 284	3, 227	3, 204	3, 265	3, 252	3, 207	3, 177
全設問（%）	56.6	60.8	61.7	61.1	57.0	51.2	65.5	59.9	61.9
【1】発音・文強勢	53.3	48.5	65.4	45.2	66.6	46.9	59.8	64.3	64.5
【2】語彙	53.0	54.0	46.4	50.6	41.2	47.9	49.6	35.5	64.5
【3】文法・語法	55.5	67.2	68.8	79.0	67.0	55.7	63.9	56.0	74.3
【4】文法・表現	42.6	66.8	47.9	53.3	40.3	42.9	71.4	59.8	70.1
【5】口語表現	86.4	76.7	70.7	74.4	73.5	45.8	83.9	65.7	55.2
【6】整序・作文	42.8	56.3	65.7	55.6	55.2	55.2	60.9	66.3	40.0
【7】長文読解	54.8	62.3	61.8	63.7	52.7	51.2	60.5	63.3	61.6
【8】聞き取り	72.1	50.6	60.0	70.7	75.1	59.1	75.5	60.4	72.5

また、報告書では、中学校・高等学校間の連携・接続に向けた具体的な指導例として、英語によるコミュニケーションの場面や活動を行う目的を明確にし、語彙や表現を適切に用いながら、ペアやグループでまとまった英文や会話の内容を伝え合わせるような活動例が挙げられ、活動の評価法についても提案されている。この具体的な指導例を参考に、本研究では、小・中・高等学校のそれぞれの学習段階において、4技能の中の「書くこと」をどのように扱い、既習の知識を活用させながら、学校

段階間の円滑な学びの接続につなげるかといった点を意識して、実践を進めることとした。

## (2) 学校段階間の学びの接続を目指した指導の実践及び効果的な指導法について

小・中・高等学校の研究協力委員による、学校段階間の学びの接続を目指した指導の実践の概要は次のとおりである。それぞれの手だての効果を検証するために、授業中の観察、ワークシートへの記入状況、振り返りの内容やアンケート結果などを基に、児童生徒の変容を分析することとした。

### ア 稲沢市立大里東小学校「小学校外国語活動から外国語科に向けた実践」【実践報告1参照】

新学習指導要領を踏まえ、小学校中学年の外国語活動及び高学年の外国語科の授業実施に向けた、校内体制づくりと授業実践に取り組んだ。授業の「めあて」の提示と振り返りの工夫や、担任とALTの指導上の役割を明確にする効果を、アンケート結果や授業分析により検証した。

「聞くこと」「話すこと」を中心とした実践により、授業で学んだことが身に付いていると児童に実感させることができ、外国語活動への意欲が高まっていることを確認できた。今後は、小学校高学年に求められる、「書くこと」を扱う実践や評価を充実させることが課題である。

### イ 東浦町立西部中学校「外国語科指導における小・中学校の接続に向けた実践」

#### 【実践報告2参照】

小学校外国語活動と中学校外国語科の接続を目指した授業実践を行った。外国語活動で音声を中心に慣れ親しんだ表現や知識を、外国語科で主に書く活動を通して定着・活用させる工夫とその効果を、アンケート結果や授業分析により検証した。

デジタル教材を用いて小学校の学習内容の復習をし、文の構造や単語の意味についての理解を深めさせることが、知識や表現を積極的に活用させる上で有効であることを確認できた。今後は、「書くこと」への苦手意識を克服させるための手だてを更に工夫することが課題である。

### ウ 県立加茂丘高等学校「外国語科指導における中学校・高等学校の接続に向けた実践」

#### 【実践報告5参照】

平成26、27年度文部科学省「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究」に取り組み、その後「主体的・対話的で深い学び」による思考力・判断力・表現力等の育成に向けて、研究を継続している。平成29年度は、中学校・高等学校間の学びの接続を目指し、指導と評価の改善に組織的に取り組んだ。

## (3) CAN-DOリストの活用を通じた実践及び効果的な指導・評価法について

### ア 「CAN-DOリストの活用に関するアンケート」の実施

高等学校英語5年目及び10年目経験者研修受講者（64名）を対象に行った「CAN-DOリストの活用に関するアンケート」（資料1）の結果を参考に、CAN-DOリストの活用に関する課題と解決法について協議し、実践に生かすこととした。

#### 【資料1 CAN-DOリストの活用に関するアンケート】（愛知県総合教育センター、平成29年8月）

質問1 校内で作成し、平成28年5月までに県教育委員会に提出したCAN-DOリストは、どのような場面で活用されていますか（複数回答可）

- |                                   |             |
|-----------------------------------|-------------|
| ① 年間や学期の指導計画を立てる際                 | 24名 (37.5%) |
| ② 年間や学期の評価（パフォーマンステストを含む）の計画を立てる際 | 13名 (20.3%) |
| ③ 単元や各授業の指導計画を立てる際                | 10名 (15.6%) |
| ④ 定期考査を作成する際                      | 2名 (3.1%)   |
| ⑤ 授業で使用するワークシートを作成する際             | 2名 (3.1%)   |

⑥ 授業を実施する際	1名 (1.6%)		
⑦ パフォーマンステストを実施し、評価する際	11名 (17.2%)		
⑧ 生徒が学習について振り返る際	3名 (4.7%)		
⑨ 教員が学習指導や評価方法について振り返る際	10名 (15.6%)		
⑩ 生徒や保護者に学習到達目標を示す際	3名 (4.7%)		
⑪ 上記以外の場面 【 新転任の教員と目標を共有するため 】	1名 (1.6%)		
⑫ ほとんど（または全く）活用されていない	32名 (50.0%)		
質問2 校内での CAN-DO リストの活用に関して、現在どのようなことが課題であると思いますか （記述） ※ 多数回答の内容を掲載			
・ 実際に使う機会が少ない	17名 (26.6%)		
・ 教員間や学年間で目標が共有されておらず、共通理解が図れていない	16名 (25.0%)		
・ 更新・修正されていない	10名 (15.6%)		
質問3 校内の CAN-DO リストを活用するために、リストの内容の見直しや修正は必要であると思 いますか			
① 必要	29名 (45.3%)	② どちらかといえば必要	18名 (28.1%)
③ どちらかといえば必要ない	12名 (18.8%)	④ 必要ない	5名 (7.8%)
理由（記述） ※ 多数回答の内容を掲載			
・ 教科書の内容の変更や生徒の実態の変化に対応するために、必要である	24名 (37.5%)		
・ 英語科内で共通理解を図ったり目標の再確認をしたりするために必要である	8名 (12.5%)		
・ 修正よりもまずは活用をするべきであり、必要ない	7名 (10.9%)		
質問4 校内で CAN-DO リストの活用を進めるために、どのような工夫や改善が必要であると思 いますか（記述） ※ 多数回答の内容を掲載			
・ 教科会（4月、年度末等）で、目標についての共通理解を図ることが必要である	17名 (26.6%)		
・ 年間学習指導計画と関連させることが必要である	3名 (4.7%)		
・ 他校の作成・活用例を参考にするなどの、情報共有が必要である	3名 (4.7%)		

アンケートの質問1において、CAN-DO リストの活用場面について尋ねた。4割程度が「年間や学期の指導計画を立てる際」と回答したが、全体の半数が「ほとんど（または全く）活用されていない」と回答した。校内で CAN-DO リストを作成したことが、指導や評価の改善に生かされているとは言えないと思われる。このアンケート結果を、CAN-DO リストの内容を日頃の指導や評価に生かし、生徒も教員も学習到達目標の達成度を把握し、校内の英語科内のみならず、保護者や他教科・異校種の教員とも目標を共有するための方策について検討するための参考資料とした。

#### イ 各校における授業実践の概要

##### (ア) 県立豊野高等学校 「CAN-DO リストの活用を通じた指導と評価の実践」

#### 【実践報告3参照】

「コミュニケーション英語Ⅰ」の指導と評価において、CAN-DO リストを単元や授業の目標と関連させ、言語活動やパフォーマンステストのねらいと学習到達目標とのつながりを生徒に意識させる工夫をした。生徒の英語学習やコミュニケーション活動に対する意欲の変化を、アンケート結果の分析により検証した。

生徒の英語の学びに対する達成感や充実感が、「話すこと」「書くこと」を中心とした活動のみ

ならず、グループ・ワークなどを通して「理解する」プロセスでも高まることが確認できた。今後は、4技能（5領域）をバランスよく育成するために、指導と評価の一体化を更に進めることが課題である。

(イ) 県立惟信高等学校 「CAN-DO リストの活用を通じた指導と評価の実践」

#### 【実践報告4参照】

平成25～27年度に、文部科学省の「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」に取り組んだ成果を生かし、現在もパフォーマンス評価のモデルとなる取組を英語科全体で継続している。

「英語表現I」の指導と評価において、CAN-DO リストを基に、単元のCAN-DOを作成し、授業用ワークシート、パフォーマンス評価用ルーブリック及び振り返りシートを用いて、生徒に学習到達目標とその到達度を把握させる工夫をした。生徒の英語学習やコミュニケーション活動に対する意識の変化を、振り返りの記述内容やアンケート結果の分析により検証した。

(ウ) 県立加茂丘高等学校「学校段階間の連携に向けたCAN-DO リストの作成及び活用例」

#### 【実践報告5参照】

豊田市立藤岡中学校、豊田市立藤岡南中学校との授業交流や連携事業を通じた、学校段階間の学習到達目標のつながりを示したCAN-DO リストの作成及び活用に取り組んだ。新学習指導要領で示された5領域の目標を参考に、つながりをもたせるべき項目例を具体的に設定し、小・中・高等学校における学びの接続を目指したCAN-DO リストの例を作成した。

本実践を通して、同じ地域の異なる学校種間で育てたい生徒像を共有し、外国語科指導における連携を密にすることが可能となった。今後は、その積極的な活用により、学校段階間の指導の接続の効果や課題の検証を行い、小・中・高等学校の外国語科指導の接続が図られることを期待したい。

## 5 研究の成果と今後の課題

本研究を通して、学習到達目標を明確にし、学校段階間の学びの接続の視点から指導や評価の工夫をすることは、児童生徒の英語学習への意欲を高めたり、英語によるコミュニケーション能力を向上させたりする効果があることが明らかとなった。また、研究協議会を重ねたことにより、学校段階間で情報を共有し、新学習指導要領を見据えた議論が深まったことは大きな成果であった。以下に、本研究の成果と課題をまとめ、各校の今後の取組への指針を示す。

### (1) 小・中・高等学校の外国語科指導における連携・接続について

#### ア 指導内容の接続

【実践報告1】では、小学校における外国語科指導を日本人教師が中心となり行うための工夫とその効果が示された。学習到達目標を提示したり、振り返りを工夫したりすることは、小学校外国語活動及び外国語科の指導において有効な手だてであった。また、【実践報告3】でも、学習到達目標を提示したり、振り返りを工夫したりする手だての有効性が示された。このことから、こうした手だてを中学校や高等学校の外国語科指導に応用できるとよい。【実践報告2】の実践では、小学校外国語活動の単元・言語材料の復習や活用を取り入れ、小・中学校の指導の接続の効果を検証した。デジタル教材を用いた復習の効果を生かし、生徒が苦手意識をもちやすい「書くこと」への動機付けや、中学校での英語学習への積極的な取組にもつなげたい。中学校で行われるインタビュー結果をグループで話し合い、発表させるという活動は、【実践報告3】の高等学校におけるグループでの話し合い・発表と評価の活動につながっている。【実践報告4】の授業実践で、Small Talk や Show & Tell の活動が取り入れられているが、これは小・中・高等学校全てに共通する言語活

動の例である。【実践報告5】の授業実践の、帯活動（コミュニケーション活動）や、グループ・プレゼンテーションも、中学校と高等学校の間の接続を可能にさせる指導例である。

#### イ 今後の課題

今後は、小学校外国語科における評価法、各学校段階での観点別評価やパフォーマンス評価の方法を中心に、外国語科評価法における小・中・高等学校の接続について研究していく必要がある。また、各学校で使用されている教材・教科書の題材、言語材料及び言語活動を、学校段階間の指導の接続に有効活用することや、地域の学校間の連携を更に密にすることが求められる。

### (2) CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価の在り方について

#### ア 目標の共有と具現化

【実践報告3】において、CAN-DOリストを生徒に配付し、単元の指導目標や評価のねらいと学習到達目標の関連性を意識させることで、どの技能をどのように伸ばすために学習を行うかが明確になり、学習意欲を向上させる効果があることが確認できた。【実践報告4】において、CAN-DOリストの活用を通じた指導と評価を実施し、生徒に学習への見通しをもたせ、振り返りをさせることで、自律した学習者の育成が可能になることが確認できた。【実践報告5】では、学習到達目標や育てたい生徒像を、地域の中学校と共有するために、CAN-DOリストの活用を図った。5領域の項目を細分化し、小・中・高等学校の学習到達目標のつながりを具体的に示したモデルを作成した。

CAN-DOリストを基に、シラバスやワークシートなどの生徒や保護者の目に触れるものに、単元の指導計画や単元のCAN-DOなどを反映させることは、学習到達目標について共通理解を図るための手助けとなる。また、【実践報告4】や【実践報告5】で提案されたように、CAN-DOリストの活用や共有を通して、校内及び校外における教員同士の関係性を深めることや、更に実用性の高いCAN-DOリストへと修正することも可能となる。

#### イ 評価方法の改善

CAN-DOリストを基に5領域をバランスよく評価するための方法を検討し、定期考査を作成したり、パフォーマンステストを実施したりすれば、より妥当性や信頼性の高い評価が可能となる。評価後に、学習到達目標の達成度を生徒や保護者に伝えることもできる。これについては、【実践報告5】において、能力記述文の達成に向けた段階的な指導計画と効果測定が扱われている。さらに、児童生徒の学習到達状況に応じた指導と評価を可能にさせる、CAN-DOリストの在り方についても報告されている。また、【実践報告3】において、ルーブリックや振り返りにより、評価やフィードバックを工夫するだけでなく、学習到達目標と評価の関係を、生徒に分かりやすく伝えるために、定期考査の出題内容と指導目標とのつながりを再考すべきであるという課題が出された。

#### ウ 学習到達目標の見直し

年間の指導の実施状況や評価の結果、生徒・教員アンケートなどに基づき、学習到達目標の達成状況を把握し、次年度に向けて修正を行うことが必要である。【実践報告4】において、CAN-DOリストを用いた指導と評価の実践とその軌道修正を繰り返すことによる成果と課題を、外国語科内で共有し、CAN-DOリストの修正を図るという課題が出された。さらに、英語の4技能を測るための新大学入試の動向も見据えて、各民間試験のCEFRをベースとしたとCAN-DOリストと、校内の学習到達目標のつながりを考えることも今後必要となる。【実践報告3 p.9 資料B】【実践報告4 p.11～ p.13 資料8】に掲載した、高等学校CAN-DOリストの例において、特に次の資料2に示した点について、各校の学習到達目標の見直しの参考とされたい。

## 【資料2 CAN-DOリストに関して参考とすべき点】

- ・卒業時の目標や、育てたい生徒像が明示されている
- ・4技能（5領域）の育成に向けて、学習段階（学年）ごとの目標が適切に設定されている
- ・能力記述文に、具体的な語数・程度など評価可能な内容が含まれている
- ・コミュニケーション活動や言語活動を通して、身に付けることが期待される能力が示されている
- ・ディスカッションやディベートなどの活動目標と、能力記述文の内容に関連性がある
- ・外部指標との対応や目標指標が示されている（例：〇〇検定〇〇級合格〇〇〇名以上）
- ・学校のホームページに掲載するなど、校外に広く発信できる記述内容になっている

また、中学校においては、「『グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方』リーフレット 実践事例編：中学校外国語（英語）科 愛知県教育委員会版 CAN-DO リスト」（愛知県義務教育問題研究協議会 平成29年3月）も参考に、CAN-DO リストの作成・活用を図られたい。

## 6 おわりに

「CAN-DO リストの活用を通じた外国語科指導法」をテーマに掲げ、小中高接続の視点から実践研究を進めたことにより、外国語指導における学校段階間の接続や、各学校段階における指導と評価の改善に向けた方策の一端を示すことができたと思う。

平成29年度は、小・中・高等学校の研究協力委員で実践研究を行う初年度であったため、実践内容や研究のまとめに関して、多くの課題が残されている。今後も、外国語科指導において、小・中・高等学校で一貫した目標を実現できるように、各地区や各学校段階における、指導の接続や学びの連続性につながる学習活動がますます積み上げられ、充実していくことを期待する。

## 参考資料・参考文献等

- 文部科学省『小学校，中学校 学習指導要領』平成29年3月公示
- 文部科学省（2017）『小学校，中学校 学習指導要領解説 外国語編』
- 文部科学省（2010）『高等学校 学習指導要領解説 外国語編・英語編』
- 文部科学省（2016）『平成28年度英語教育実施状況調査』
- 文部科学省（2016）『幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）』
- 文部科学省（2013）『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』
- 愛知県教育委員会（2016）『愛知県英語教育改善プラン』
- 愛知県義務教育問題研究協議会（2017）  
『「グローバル化に対応した新たな英語教育の在り方」リーフレット』
- 愛知県総合教育センター『平成29年度 高等学校新入学生徒の学力に関する研究（英語）』
- 愛知県総合教育センター『研究紀要』第98，99，102，104集
- 愛知県総合教育センター（2017）  
『指導と評価の充実に向けて ～学習評価の工夫改善を意識した学習指導のポイント～』
- 愛知県総合教育センター（2017）『授業の手引 高等学校英語』
- 『英語4技能評価の理論と実践 —CAN-DO・観点別評価から技能統合的活動の評価まで—』  
望月昭彦，印南洋，小泉利恵，深澤真 著 大修館書店 2015

- 『CAN-DO リスト作成・活用 英語到達度指標 CEFR-J ガイドブック』 投野 由紀夫 編  
大修館書店 2013
- 『ヨーロッパ言語共通参照枠 (CEFR) から学ぶ英語教育』 キース・モロウ 編 研究社 2013
- 『小学校英語教科化への対応と実践プラン』 吉田 研作 編 教育開発研究所 2017
- 『小学校英語から中学校英語への架け橋 文字教育を取り入れた指導法モデルと教材モデルの開  
発研究』 小野尚美 他 朝日出版社 2017

## 実践報告 1

# 小学校外国語活動から外国語科に向けた実践

## ー日本人教師とALTの役割を明確にし、「めあて」と振り返りを取り入れた授業実践ー

稲沢市立大里東小学校 教諭 鈴木 啓太

### 1 はじめに

2020 年度の小学校新学習指導要領の完全実施に向け、小学校高学年の外国語の教科化や中学年の外国語活動の導入と、それに伴う授業時数の増加など、小学校における外国語教育の役割はますます大きくなり、授業内容の見直しが必要となっている。

現行の外国語活動について、日本人教師と ALT とのチーム・ティーチングで実施している学校の中では、ALT が主体となって授業が進められている学校も少なくない。しかし、平成 30 年度から新学習指導要領実施に向けての移行措置により、小学校 3～6 年生においては年間 15 時間授業時数が増えることになる。さらに、先行して実施する学校では、小学校 3～6 年生において年間 35 時間授業時数が増えるため、全ての授業において ALT とのチーム・ティーチングを行うことは難しくなると考えられる。担任が原則として外国語活動や外国語科の授業を行う場合には、指導方法や評価の面で、負担は増すことになる。このことから、現在小学校高学年で行っている外国語活動の指導において、日本人教師と ALT との役割を明確にすることで、より効果的な外国語指導の在り方を探り、平成 30 年度からの指導に生かすことが必要であると考えた。

本校は、平成 29 年度、稲沢市より「小学校英語教育推進事業」の委託を受け、「授業内容の見直し」と「日本人教師と ALT との役割の明確化」を 2 本の柱とし、研究を進めている。さらに、本実践において、今後の小学校中学年と高学年の接続を視野に入れて、授業実践を進めていきたいと考えた。

### 2 児童の実態

本校第 5 学年児童 85 名に対し、外国語活動の授業に対する意識調査を行った(平成 29 年 6 月実施)。

質問 1 外国語活動の授業は楽しいですか。

- |            |              |
|------------|--------------|
| ① とても楽しい   | 31 人 (36.5%) |
| ② 楽しい      | 34 人 (40.0%) |
| ③ あまり楽しくない | 13 人 (15.3%) |
| ④ 楽しくない    | 7 人 (8.2%)   |

質問 2 ALT の先生が話していること (英語での指示やゲームなどの説明) は分かりますか。

- |                |              |
|----------------|--------------|
| ① ほとんど分かる      | 26 人 (30.6%) |
| ② どちらかと言えば分かる  | 43 人 (50.6%) |
| ③ どちらかと言えば分らない | 10 人 (11.8%) |
| ④ 分からない        | 6 人 (7.0%)   |

質問3 授業で学んだことが身に付いている（聞いて分かったり、話したりすることができる）と思いますか。

① ほとんどできている	32人 (37.6%)
② どちらかと言えばできている	40人 (47.1%)
③ どちらかと言えばできていない	8人 (9.4%)
④ できていない	5人 (5.9%)

意識調査の結果によると、20%程度の児童が、「ALT が授業中に話していることがどちらかと言えば分からない、または分からない」と答えている。また、15%程度の児童が、「授業で学んだことが身に付いていない」と答えており、「授業で学んだことがほとんど身に付いている」と答えている児童は40%に達していないことが分かった。

そこで、児童に、ALT が話す内容を理解させる手だてや学んだことが身に付いたと実感させる手だてが必要であると考えた。

### 3 研究の目的

小学校新学習指導要領（文部科学省，平成29年3月）の「第4章 外国語活動」の「第1 目標（1）」には、「外国語を通して、言語や文化について体験的に理解を深め、日本語と外国語との音声の違い等に気付くとともに、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しむようにする」と記されている。一方、「第2章第10節 外国語」の「第1 目標（1）」には、「外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする」と記されている。このことを踏まえ、児童が授業で学んだ内容が身に付いていると実感できるような授業展開を工夫し、その効果を検証する。また、本校の児童の実態から、授業中にALT が話す内容を児童によりよく理解させ、授業中の言語活動により積極的に取り組ませることで、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成を目指す。

### 4 研究の仮説

研究の目的を達成するために、次のような仮説を立てて検証することとした。

仮説1：授業の冒頭での「めあて」の提示の仕方や、授業の最後での「振り返り」を工夫すれば、児童に学んだ内容が身に付いたと実感させることができるであろう。

仮説2：担任とALT とのチーム・ティーチングにおいて、それぞれの役割を工夫すれば、児童に授業内容を理解させ、言語活動により積極的に取り組ませることができるであろう。

### 5 研究の方法

研究の仮説を検証するため、外国語活動の授業において以下の方法で実践を行うことにした。

#### (1) 「めあて」と「振り返り」に関する工夫の手だて

ア 「めあて」の提示による各授業の目標の明確化…**手だてA**

(ア) 授業の冒頭に担任（以下、HT：ホームルーム・ティーチャーと示す）が日本語で本時の「めあて」を板書し、児童に示す。

(イ) 視覚的に児童に訴えるために、「めあて」を示す際 “Today’s Target” という札を見出しとして用いる。

(ウ) 振り返りの際に用いる振り返りシート (Feedback Sheet) (p. 10 資料 3) にも、本時の「めあて」を記載する。

イ 振り返りシート (Feedback Sheet) を用いた、振り返りによる学習内容の定着化…**手だて B**

(ア) 授業の最後に振り返りシート (Feedback Sheet) を用いて、授業の冒頭に確認した「めあて」に対して 4 段階で自己評価させる。

(イ) 授業を通して、どのようなことができるようになったのか、具体的に記述させる。

## (2) HT と ALT の役割に関する工夫の手だて

ア コミュニケーション活動の説明に対するリスニングポイントの提示…**手だて C**

(ア) ALT が英語でコミュニケーション活動の説明をする前に、HT が日本語でその説明に対するリスニングポイントを示し、聞き取らせる。

(イ) リスニングポイントの内容が理解できたか児童に確認する。

(ウ) 児童が聞き取れなかった部分や、リスニングポイントに示さなかった細部について、HT が補足説明をし、取り組む活動について理解を深めさせてからコミュニケーション活動に取り組ませる。

イ HT と ALT による会話のデモンストレーション…**手だて D**

(ア) コミュニケーション活動で用いる会話例を HT が板書し、児童にモデルを示す。

(イ) ALT がコミュニケーション活動について説明しながら、HT と ALT で実際の会話例をジェスチャーなどを交えて示す。

## (3) 検証方法

ア アンケートによる児童の意識の変化の把握

イ 児童の様子や反応、コミュニケーション活動への取組の分析

## (4) 単元構想

1 単元名	Lesson 6 What do you want? アルファベットを探そう	
2 単元の目標	<ul style="list-style-type: none"><li>積極的にアルファベットの大文字を読んだり、欲しい物を尋ねたり答えたりしようとする。</li><li>アルファベットの文字とその読み方を一致させ、欲しい物を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむ。</li><li>身の回りに、アルファベットの大文字で表現されている物があることに気付く。</li></ul>	
3 単元の評価規準		
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語への慣れ親しみ	言語や文化に関する気付き
積極的にアルファベットの大文字を読んだり、欲しい物を尋ねたり答えたりしようとしている。	アルファベットの大文字とその読み方を一致させ、欲しい物を尋ねたり、答えたりする表現に慣れ親しんでいる。	身の回りに、アルファベットの大文字で表現されている物があることに気付いている。

#### 4 単元の概要と言語活動

本単元は、初めてアルファベットの文字を題材とする単元である。ここでは、アルファベットの大文字を知り、その読み方に慣れ親しむとともに、身の回りにはアルファベットの大文字の表示がたくさんあることに気付かせることをねらいとしている。また、相手に何が欲しいか尋ねたり、それに答えたりする表現に慣れ親しむこともねらいとしている。

学んだアルファベットの大文字を用いながら、相手に何が欲しいか尋ねたり答えたりする言語活動を工夫することで、アルファベットの大文字を読むことができるようになったり、相手とお互いに何が欲しいかについて尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しませる。

#### 5 単元の指導計画（全4時間） ※1時間：45分

	学 習 活 動 (児童)	言語活動に関する指導上の留意点 (教師)
全時間	(冒頭) ・本時の「めあて」を確認する。  (最後) ・振り返りシートで本時の授業を振り返る。	・全時間において、授業の冒頭でその時間の「めあて」を提示し、学習意欲を高めさせる。 <b>手だてA</b>  ・全時間において、授業の最後にその時間の「めあて」に対して、自己評価を行わせる。 <b>手だてB</b>
第1時	<b>【身の回りのアルファベットの大文字を見つける】</b> ・アルファベットの大文字を見て、ALTと発音練習をする。  ・アルファベットの大文字が含まれる写真の中から、アルファベットの大文字を見つける。 ・自分の文房具や身に付けている衣類からアルファベットの大文字を見つける。	・“B”と“V,” “L”と“R,” “M”と“N,” “G”と“Z”の発音の違いを意識させて発音練習させる。 ・身近な風景や物が写った写真を用いて、次の活動へつなげる。  ・児童が見つけたアルファベットが書かれた文房具や衣類を見せて、発音させる。
第2時	<b>【アルファベットの大文字を正しく読む】</b> ・アルファベットの大文字を見て、ALTと読み方を復習する。 ・ALTのコミュニケーション活動についての説明を聞く。 ・読まれたアルファベットの順に線で結び、現れるアルファベットや数字が何かを答える。 (Hi, friends! 1 p.24 Let's Listen)	・HTがアルファベットの大文字のカードを児童に見せて、発音練習の補助をする。 ・ALTの説明の前に、HTが以下のリスニングポイントを児童に日本語で与える。 <b>手だてC</b>  <b>〔リスニングポイント〕</b> 聞こえたアルファベットをどうしていくか。

	学 習 活 動 (児童)	言語活動に関する指導上の留意点 (教師)
第3時	<p>【アルファベットを正しく読み、相手に欲しいアルファベットを尋ねたり、それに答えたりする】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手に何が欲しいか尋ねる表現 “What do you want?” を ALT と練習する。</li> <li>・相手に何が欲しいか尋ね、それに答える表現を ALT と練習する。</li> <li>・HT からコミュニケーション活動の説明に対するリスニングポイントを聞く。</li> <li>・HT と ALT のデモンストレーションを見ながら、ALT からコミュニケーション活動についての説明を聞く。</li> <li>・HT からリスニングポイント以外のルールについての説明を聞く。</li> <li>・コミュニケーション活動を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・HT は “What do you want?” と板書する。</li> <li>・HT は以下の表現を板書する。 A : What do you want? B : The ___ card, please.</li> <li>・ALT の説明の前に、HT がリスニングポイントを児童に日本語で与える。 <b>手だてC</b></li> <li>・ジェスチャーも加えて、デモンストレーションを行う。<b>手だてD</b></li> </ul>
第4時	<p>【相手に欲しい物を尋ねたり、それに答えたりする】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・前時の会話例を復習する。 A : What do you want? B : The ___ card, please.</li> <li>・HT からコミュニケーション活動についての説明のリスニングポイントを聞く。</li> <li>・HT と ALT のデモンストレーションを見ながら、ALT のコミュニケーション活動についての説明を聞く。</li> <li>・リスニングポイントについて、聞き取った内容を発表する。</li> <li>・リスニングポイント以外のルールについて HT からの説明を聞く。</li> <li>・コミュニケーション活動を行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ALT と児童、男子児童と女子児童といったように、さまざまなパターンで練習させる。</li> <li>・ALT の説明の前に、HT がリスニングポイントを児童に日本語で与える。 <b>手だてC</b></li> <li>・ジェスチャーも加えて、デモンストレーションを行う。<b>手だてD</b></li> <li>・英語だけで、コミュニケーション活動を行わせる。</li> </ul>

## 6 学習活動と新学習指導要領との関連

- アルファベットの大文字を正しく読むことができる。

### イ 読むこと

- (ア) 活字体で書かれた文字を見て、どの文字であるかや、その文字が大文字であるか小文字であるかを識別する。
- (イ) 活字体で書かれた文字を見て、その読み方を適切に発音する。

- 相手に欲しい物を尋ねたり、答えたりすることができる。

### ウ 話すこと〔やり取り〕

- (ア) 初対面の人や知り合いと挨拶を交わしたり、相手に指示や依頼をして、それらに応じたり断ったりする。
- (ウ) 自分に関する簡単な質問に対してその場で答えたり、相手に関する簡単な質問をその場でしたりして、短い会話をする。

## 7 言語活動の充実の工夫

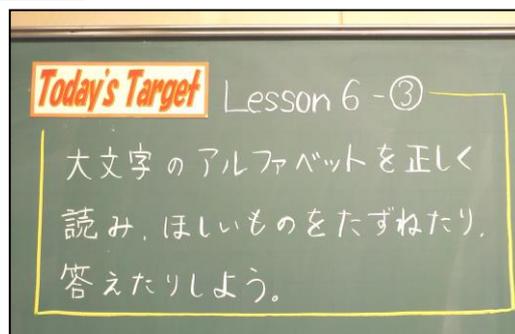
本単元では、「読むこと」と「話すこと〔やり取り〕」を有機的に結び付け、アルファベットの大文字を正しく読むことができることと、相手に欲しい物を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむことをねらいとしている。アルファベットの大文字を第1時、第2時を中心に取り扱い、アルファベットの大文字を用いて相手に欲しい物を尋ねたり答えたりさせることで、アルファベットの大文字とその読み方を一致させるとともに、欲しい物を尋ねたり答えたりする表現に慣れ親しむことを目標とする。

## 6 研究の実際と考察

### (1) 「めあて」と「振り返り」

ア 「めあて」の提示による各授業の目標の明確化…**手だてA**

毎時間授業の冒頭で、担任が本時の授業で「具体的に何ができるようになるか」を示した目標を日本語で板書し、授業中児童がいつでも確認できるようにした。他教科においても、毎授業の冒頭に、本時の「めあて」をノートに書いたり、板書された「めあて」を確認したりして授業に臨んでいるため、外国語活動においても「めあて」を提示することは、児童にとって特別なことではなく、受け入れることができている。



【「めあて」の板書】

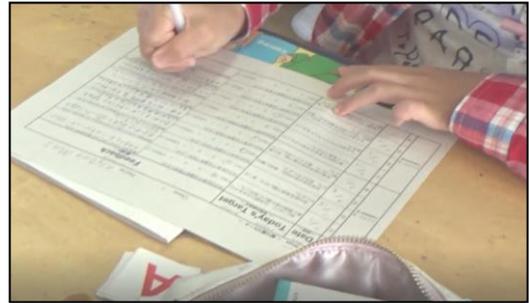
以下に、単元 Lesson 6 の毎授業の「めあて」を示す（資料1）。

### 【資料1 Lesson 6の本時の「めあて」】

単元	本時の「めあて」
Lesson 6-①	身の回りにある大文字のアルファベットを見つけよう。
Lesson 6-②	大文字のアルファベットを正しく読もう。
Lesson 6-③	大文字のアルファベットを正しく読み、欲しい物を尋ねたり答えたりしよう。
Lesson 6-④	友達に欲しい物を尋ねたり、友達に欲しい物を答えたりしよう。

イ 振り返りシート（Feedback Sheet）を用いた，振り返りによる学習内容の定着化…**手だてB**

授業の最後に本時の目標に対して，振り返りシート（Feedback Sheet）を用いて，目標を達成できたかを4段階で児童自身に振り返らせた。また，具体的にどのようなことができるようになったかを記述させた。ほとんどの児童が，振り返りシートに書かれた本時の「めあて」を確認しながら，授業でどのようなことができるようになったのかを書くことができていた。



【振り返りシートを書く様子】

単元 Lesson 6 の第3時における児童の振り返りシートの記述例を示す（資料2）。

【資料2 児童の振り返りシートの記述例】

4段階での自己評価	コメント
4	ゲームの中で自然と英語で尋ねたり，答えたりすることができた。
4	大文字を使って欲しい物を尋ねることができたので勉強になりました。
4	「ラッキーカードゲーム」の中で，欲しい物を尋ねる時，アルファベットの発音を上手に言えました。
3	アルファベットをよく言えるようになった。
3	欲しいカードを尋ねる時，うまく尋ねられなかったけれど，答える時はしっかりできるようになりました。

ウ 事後アンケート結果

「めあて」と「振り返り」に関するアンケート結果は，次のとおりであった（平成29年10月実施）。

「めあて」や「振り返り」は，授業で学んだ内容を確認するための役に立ちましたか。	
① とても役に立った	34人（41.5%）
② どちらかと言えば役に立った	37人（45.1%）
③ どちらかと言えば役に立たなかった	9人（11.0%）
④ 役に立たなかった	2人（2.4%）

(2) HTとALTの役割

ア コミュニケーション活動の説明に対するリスニングポイントの提示…**手だてC**

ALTがコミュニケーション活動についての説明をする前に，HTが児童にリスニングポイントを2～4問与えて，要点を絞らせてALTの説明を聞かせた。この手だてによって，ALTの話している内容を理解できている児童が以前よりも増え，ALTの説明後に，聞き取れた内容を児童に発言させ確認することで，聞き取れなかった児童ともコミュニケーション活動の内容を共有することができた。

次に，本実践で実際に児童に示したリスニングポイントとコミュニケーション活動の例を示す。

単 元	活動内容	リスニングポイント
Lesson 6 -③	(1) 26 枚のアルファベットカードから 10 枚選ぶ。 (2) 相手とじゃんけんをし、A・B を決定する。 A: What do you want? B: The ___ card, please. (3) 最後 HT が示すラッキーカードが何か聞く。	①じゃんけんに勝った人、負けた人は、それぞれ板書されている A・B のどちらか。 ②どうすればゲームに勝てるか。
Lesson 6 -④	(1) グループをつくる。 (2) 26 枚のアルファベットカードから 10 枚選ぶ。 (3) 相手が欲しいと言ったカードがない場合は、残りの 16 枚から 1 枚カードを取る。 (4) 手持ちのカードの少なさを競う。	①相手に言われたカードがなかったらどうするか。 ②どうすればゲームに勝てるか。

イ HT と ALT による会話のデモンストレーション…**手だてD**

HT と ALT でコミュニケーション活動のデモンストレーションをしながら、ALT が活動について説明するようにした。その際、コミュニケーション活動で用いる会話例を板書し、その会話文を使う際に板書を手で指し示し、児童に分かりやすくした。



ウ 事後アンケート結果

「リスニングポイント」に関するアンケートの結果は、次のとおりであった（平成 29 年 10 月実施）。

リスニングポイントは ALT が話していることを理解するための役に立ちましたか。

- |                    |              |
|--------------------|--------------|
| ① とても役に立った         | 40 人 (48.8%) |
| ② どちらかと言えば役に立った    | 37 人 (45.1%) |
| ③ どちらかと言えば役に立たなかった | 4 人 (4.9%)   |
| ④ 役に立たなかった         | 1 人 (1.2%)   |

(3) 事後アンケートの実施

本校第 5 学年児童 82 名に対し、外国語活動の授業に対する意識調査を行った(平成 29 年 10 月実施)。

[ ] 内は、事前アンケート(平成 29 年 6 月実施)の結果との差を示す。

質問 1 外国語活動の授業は楽しいですか。

- |            |                       |
|------------|-----------------------|
| ① とても楽しい   | 39 人 (47.6%) [+11.1%] |
| ② 楽しい      | 34 人 (41.5%) [+1.5%]  |
| ③ あまり楽しくない | 7 人 (8.5%) [-6.8%]    |
| ④ 楽しくない    | 2 人 (2.4%) [-5.8%]    |

質問 2 ALT の先生が話していること(英語での指示やゲームなどの説明)はわかりますか。

- |                 |                      |
|-----------------|----------------------|
| ① ほとんど分かる       | 25 人 (30.5%) [-0.1%] |
| ② どちらかと言えば分かる   | 49 人 (59.8%) [+9.2%] |
| ③ どちらかと言えば分からない | 6 人 (7.3%) [-4.5%]   |
| ④ 分からない         | 2 人 (2.4%) [-4.7%]   |

質問3 授業で学んだことが身に付いている（聞いて分かったり、話したりすることができる）と思いますか。

① ほとんどできている	45人 (54.9%) [+17.3%]
② どちらかと言えばできている	30人 (36.6%) [-10.5%]
③ どちらかと言えばできていない	7人 (8.5%) [-0.9%]
④ できていない	0人 (0.0%) [-5.9%]

## 7 成果と課題

### (1) 仮説1の検証

10月に実施したアンケート結果と6月に実施したアンケート結果を比較すると、授業で学んだことが身に付いていると答える児童は大幅に増加した。また、86%以上の児童が、「めあて」や「振り返り」が授業で学んだことを確認するための役に立ったと答えている（p. 7 ウ 事後アンケート結果参照）。

このことから、授業の冒頭で「めあて」を提示したり、授業の最後に「振り返り」を実施したりすれば、授業で児童に学んだことが身に付いたと感じさせることができることが分かった。

### (2) 仮説2の検証

10月に実施したアンケート結果と6月に実施したアンケート結果を比較すると、ALTの話すことを理解していると答える児童も増加した。また、93%以上の児童が、HTが示すリスニングポイントは、ALTが話すことを理解するために役に立ったと答えている。このことから、HTとALTの役割を工夫すれば、児童に授業の内容を理解させることができることが分かった。

### (3) 今後の課題

本実践では、「めあて」の提示や「振り返り」の取組や、HTとALTのチーム・ティーチングにおけるそれぞれの役割を工夫することで、児童の理解度が高まったことが分かった。新学習指導要領ではアルファベットを書く指導が必要となるため、「書くこと」の指導方法について更なる研究に取り組む必要がある。また、小学校高学年の教科化に伴い、評価についても課題の一つとして挙げられる。

## 8 おわりに

本実践では、小学校第5学年の外国語の授業では、「めあて」の提示や「振り返り」の取組が有効であることや、HTとALTのチーム・ティーチングにおいてそれぞれの役割を工夫することが重要であることを確認できた。今後も、小学校中学年と高学年の接続や、小学校高学年と中学校の接続を視野に入れて、研究を進めていきたい。

## 参考文献等

- 文部科学省『小学校学習指導要領』平成29年3月公示
- 『小学校英語教科化への対応と実践プラン』吉田 研作 編 教育開発研究所 2017

【資料3 振り返りシート (Feedback Sheet)】

フィードバック シート		フィードバック	
5年生 Feedback Sheet ~ 振り返りシート ~		Feedback	
Date	Today's Target	Feedback	
～日付～	～今日のめあて～	～振り返り～	
①	色について、日本語のカタカナの音と英語の音の違いに気付こう。	今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことに気付きましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
		今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
②	色や形を英語で聞いたり、言ったりしよう。	今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
		今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
③	好きな色や形が何か、相手に尋ねたり、答えたりしよう。	今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
		今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
④	友達の良い色や食べ物、また動物について、進んでインタビューしよう。	今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
		今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
①	身の回りにある大文字のアルファベットを見つけよう。	今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことを見つけましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
		今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
②	大文字のアルファベットを正しく読もう。	今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
		今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
③	大文字のアルファベットを正しく読み、ほしいものを尋ねたり、答えたりしよう。	今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
		今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
④	友達にほしいものを尋ねたり、友達にほしいものを答えたりしよう。	今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた
		今日のめあては達成できましたか。	具体的にどのようなことができるようになりましたか。
		できた 4 - 3 - 2 - 1	できなかつた

## 実践報告 2

## 外国語科指導における小・中学校の接続に向けた実践

## —中学校外国語科での外国語活動教材「Hi, friends!」の活用を通して—

東浦町立西部中学校 教諭 尾崎 利奈

## 1 はじめに

2020 年度から小学校で、2021 年度から中学校で新学習指導要領が全面実施される。新学習指導要領の実施により、小学校 3 年生から外国語活動が始まり、小学校 5 年生から外国語科の授業が行われる。今後、小・中学校における外国語科指導の連携や接続が更に重要となるため、中学校の教員は、児童が中学校入学前に、外国語学習で何を学び、どのような力を身に付けてくるのか、また、特に自校の中学校区で、どのように外国語を学んだ子どもたちが入学して来るのかを知っておく必要がある。

現行の学習指導要領の下では、外国語活動の教材として、「Hi, friends! 1, 2」が各小学校で使用されている。この「Hi, friends!」で扱われている語彙や表現は、中学校の教科書で再び学習するものも多い。特に中学校第 1 学年で授業を組み立てる際に、生徒が外国語活動で慣れ親しんだ基本的な表現を把握しておけば、生徒の外国語への興味・関心を引くことができるとともに、外国語学習への抵抗感を減らすことができると思われる。

本実践では、小学校での外国語活動における学びを、中学校での外国語科の指導に生かす工夫に焦点を当て、外国語活動と外国語科の指導における円滑な接続の方法を探ることとした。

## 2 生徒の実態

本校第 1 学年 57 名に対し、5 月に小学校での外国語活動と中学校での外国語科の授業についてのアンケート調査を行った。

## ① 小学校での外国語活動は好きでしたか。

はい○	いいえ×	どちらでもない△
50.8%	21.1%	28.1%

## (主な記述)

- 英語を読んだり、ゲームをしたりして楽しかった。ALT の生の発音が聞いてよかった。
- ×ゲームばかりでおもしろくなかった。難しいことばかりで、英語が上手く話せなかった。
- △興味はもてたが、内容がよく分からなかった。答え方が分からないことがあった。

## ② 中学校での英語の授業は好きですか。

はい○	いいえ×	どちらでもない△
70.2%	12.3%	17.5%

## (主な記述)

- 単語の意味や発音を教えてもらえる。新しい英文を知ることができる。

×英語を読んだり書いたりすることができない。授業の進度が速い。

△楽しいけれど、書くことがめんどうだ。

③ 外国語活動から英語の授業に変わり、困ったことや戸惑ったことがあれば教えてください。

(主な記述)

- ・単語の発音や意味、綴りをきちんと覚えなくてはいけなくなった。
- ・英文の作り方が分からない。be 動詞と一般動詞の否定文や疑問文が分からない。
- ・教科書の英語を読むことが難しい。

①の質問では、「外国語活動が好きだった」と答えた生徒と「外国語活動が好きではなかった」「好きでも嫌いでもどちらでもない」と答えた生徒がおよそ同じ割合であり、中学校に入学する時点で、既に外国語学習に対する生徒の感じ方に差があることがうかがえる。また、外国語活動で行われるゲーム等の活動について、「外国語活動が好きだった」と答えた生徒は肯定的に捉えているのに対して、「外国語活動が好きではなかった」「好きでも嫌いでもどちらでもない」と答えた生徒は否定的に捉えていることが分かる。しかし、記述の内容をよく分析してみると、活動そのものを否定しているわけではなく、活動の中で言えるようになった英文について、もっと詳しく知りたかったという気持ちがあったようである。②の質問では、「中学校の英語の授業が好き」と答えた生徒は70%程と増えており、その中でも多くの生徒が単語や文法の知識を習得できることを理由に挙げている。逆に、「中学校の英語の授業が好きではない」「好きでも嫌いでもどちらでもない」と答えた約30%の生徒は、英語を読むことや書くことに対して抵抗感をもっている生徒が多く、このことは③の質問の回答からも分かる。外国語活動では、英文の意味が正確に分からなくても、その英文を口頭で言えたり、活動できたりすればよかったが、外国語科では、文構造や用法を理解し、知識を活用しながら4技能の力を身に付けることが求められることに、生徒は不安を感じているようである。

アンケート調査を実施した5月頃の授業では、生徒たちは英語での挨拶や、簡単な英語でのやり取りに身構えることなく活動していた。また、チャンツやNHK基礎英語等を用いて、聞くことや話すことを中心とした活動に意欲的に取り組んでいた。教科書のある程度まとまった英文を読んであらずじを理解する活動では、まだ英文を読むことに慣れておらず、教科書を見ながらCDを聞いたり、教員の範読を聞いたりするなど、聞いた音声を頼りに理解しようとする様子が多く見られた。さらに、比較的学力が上位の生徒であっても、単語や意味のまとまりを意識して英語を書くことは難しい様子であった。

### 3 研究の目的

小学校外国語活動で慣れ親しんだ基本的な表現を、中学校での外国語科指導に取り入れることの効果を検証し、小・中学校の外国語科指導の連携や学びの接続の在り方について考察する。

### 4 研究の仮説

研究の目的を達成するために、次のような仮説を立てて検証することとした。

仮説：新出の文法事項の学習において、小学校外国語活動で慣れ親しんだ表現を活用すれば、生徒は外国語活動での学びを基にして、知識を身に付けることができるであろう。

### 5 研究の方法

研究の仮説を検証するため、1年生の授業において次の方法で実践を行うこととした。

- (1) 中学校教科書 (NEW HORIZON 1, 以下 NH 1 と記す) で扱う文法事項と, 小学校外国語活動教材 (Hi, friends! 1, 2) で扱う基本的な表現との関連を把握する。
- (2) 把握した文法と関連表現を, 新出文法事項の導入に生かす単元構想を工夫する。
- (3) 授業実践及び事後アンケートを行い, 仮説の検証を行う。

## 6 研究の実際

(1) 中学校教科書 (NH 1) と, 小学校外国語活動教材 (Hi, friends! 1, 2) の関連 (一部抜粋)

NH 1	Hi, friends! 1		Hi, friends! 2	
	単元	表現等	単元	表現等
Unit 0	L6 What do you want?	アルファベット	L1 Do you have "a"?	アルファベット
Unit 1	L5 What do you like?	色		
Unit 2	L1 Hello!	Hello./ Hi.		
Unit 3	L4 I like apples.  L8 I study Japanese.	I like .... I don't like.... Do you like...? I study ....	L5 Let's go to Italy.	Let's....
Unit 4	L3 How many...?	複数形 How many...?		
Unit 5	L7 What's this?  L2 I'm happy. L5 What do you like ? L6 What do you want ?	What's this? It's... I'm 形容詞. What do you...? What do you...?		
Unit 6	該当なし			
Unit 7	L5 What do you like ?	What ... do you like?	L6 What time do you get up?	What time is it?
Unit 8			L5 Let's go to Italy.	It's in ....
Unit 9			L7 We are good friends.	Be.... Don't....
Unit 10			L3 I can swim.	I can (can't) .... Can you...?

中学校で新出文法として取り上げられるものの多くが, 既に小学校外国語活動で取り扱われていることが分かる。特に, 中学校 1 年生の 1 学期で学習する内容の多くを, 生徒たちは知っているか, 完全に理解していなくとも聞いたことがある状態で入学して来ることが分かる。また, 中学校では, 体系的に文法事項が配列されているのに対して, 小学校では, 単元の活動に合わせて, 必要な表現が取り扱われている。例えば, Hi, friends! 1 Lesson 9 では, お気に入りのランチメニューをつくる活動の中で「What would you like? —I'd like ...」が出てくるが, 中学校で would を用いた英文を学習するのは, 3 年生の中盤になる。2 年生で「want + to 不定詞」と幾つかの助動詞を学習した上で, それらの学習を踏まえて指導することとなる。

## (2) 単元構想

1 単元名 Unit 5 学校の文化祭		
2 単元の目標		
<p>(1) 疑問詞 <b>what</b> で始まる疑問文や <b>be</b> 動詞＋形容詞補語を用いて、積極的に自分の知らない物などについて尋ねたり、物の性質や状態について説明したりしようとする。</p> <p>(2) 疑問詞 <b>what</b> で始まる疑問文や <b>be</b> 動詞＋形容詞補語を用いて、自分の考えや気持ちを適切に表現することができる。</p> <p>(3) 疑問詞 <b>what</b> で始まる疑問文や <b>be</b> 動詞＋形容詞補語を含んだ英文を読んで、その内容を正しく理解することができる。</p> <p>(4) 疑問詞 <b>what</b> で始まる疑問文や <b>be</b> 動詞＋形容詞補語の用法を正しく理解することができる。また、世界の食文化の違いについて正しく理解することができる。</p>		
3 学習の計画（7時間完了）		
時間	各時間の学習課題	各時間の主な学習活動・評価
第1時	Part 1-1 疑問詞 <b>what</b> で始まる疑問文( <b>be</b> 動詞)について学習する。 ・自分が知らない物について尋ねよう。	・ <b>What is...?</b> の疑問文を用いて、自分が知らない物について尋ねようとする。 【関心・意欲・態度】 ・ <b>What is...?</b> の疑問文の形・意味・用法を知る。 【知識・理解】
第2時	Part 1-2 文化祭での光太とディーパの会話を読み取る。 ・ディーパの質問と、質問している理由を考えよう。	・ <b>What is...?</b> の疑問文を含んだ英文の内容を読み取る。 【知識・理解】
第3時	Part 2-1 <b>be</b> 動詞＋形容詞補語について学習する。 ・教科やスポーツなどについて感想を言おう。	・ <b>be</b> 動詞＋形容詞補語を用いた対話活動に取り組む。 【表現】 ・ <b>be</b> 動詞＋形容詞補語の形・意味・用法を知る。 【知識・理解】
第4時	Part 2-2 文化祭での光太とディーパの会話を読み取る。 ・日本とインドのカレーの違いを見つけよう。	・ <b>be</b> 動詞＋形容詞補語を含んだ英文の内容を読み取る。 【知識・理解】
第5時	Part 3-1 疑問詞 <b>what</b> で始まる疑問文(一般動詞)について学習する。 ・クラスの中で調査活動をしよう。	・ <b>What do you ...?</b> の疑問文を用いて、友達の好きなこと等について尋ねようとする。 【関心・意欲・態度】 ・ <b>What do you...?</b> の疑問文の形・意味・用法を知る。 【知識・理解】
第6時	Part 3-2 文化祭での咲とベッキーの会話を読み取る。 ・ベッキーの朝食を知ろう。	・ <b>What do you...?</b> を含んだ英文の内容を読み取る。 【知識・理解】

第7時	単元のまとめ ・学習事項をまとめ、単元テストに取り組もう。	・単元テストに取り組む。 【知識・理解】
-----	----------------------------------	----------------------

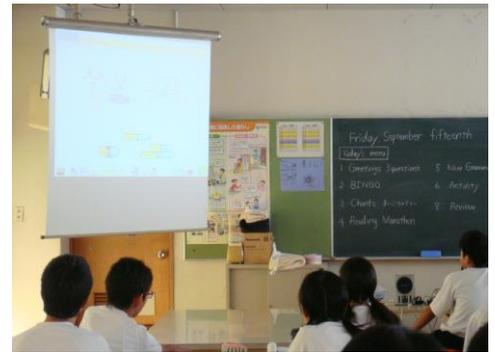
#### 4 授業のねらい

小学校での外国語活動と、中学校での教科としての英語学習の連携を図る工夫として、新出表現を学習する場面で、Hi, friends! で学んだ既習表現を導入として用いる。外国語活動で音声を中心に慣れ親しんだ表現について、文構造と使用場面についてももう一度整理することで、外国語活動で身に付けた表現の更なる定着と活用を図る。

#### (3) 授業実践の様子（第5時）

##### ア 言語材料の導入

本時に学習する新出表現 What do you ~ ? の導入として、Hi, friends! 1のLesson 6 アルファベットカードを友達とやり取りする場面をデジタル教材で導入した。デジタル教科書の表紙を見せると、生徒からは「小学校でやったことある」「5年生の教科書だ」といった言葉が聞かれた。アルファベットカードのページを見せながら、カードのやり取りをした活動について尋ねると、ほとんどの生徒がうなずきながら思い出していた。そして、メインの言語材料である、What do you want? — I want the A card. を口頭でやり取りした後、チャンツ活動に取り組み、What do you want? を用いたロールプレイの場面を視聴した。チャンツはデジタル教科書内にあるもので、英文に合わせてイラストが動き文字を介さなくとも内容が理解できるようになっている。ロールプレイの場面もデジタル教科書内にあるもので、What do you want? という表現を用いて欲しいフルーツについてやり取りをする様子を、生徒たちは理解しながら見ていた。



【言語材料の導入の様子】

##### イ 文構造についての学習

導入で用いた英文について、パワーポイントを使って文構造を整理した（資料1）。主語と動詞、疑問詞を用いた一般動詞の疑問文の語順について説明を加え、口頭練習を行った。コミュニケーション活動への導入も兼ねて、want・study・have の一般動詞を用い、質問と答え方を全員で練習した後、数人を個別に指名して、定着の度合いを確認した。

#### 【資料1 文構造についてのパワーポイント】

**Whatから始まる疑問文（一般動詞）**

**What / do you want ?**

何【疑問詞】      一般動詞の疑問文の形

**do + 主語 + 一般動詞 + ?**

**— I want the "A" card .**



【口頭練習の様子】

#### ウ 新出文構造を用いたコミュニケーション活動

クラスの友達への調査活動として、「ドラえものの道具で何が欲しいか」「毎週金曜日には何を勉強するか」「朝食として何を食べるか」についてインタビューをして、インタビューの結果をグループ内で発表させた。インタビュー活動では、事前に口頭練習を行っていたこともあり、ワークシート（p. 8 資料2）を見ながら、生徒は積極的に英語を使って活動していた。活動時間5分の間に10人にインタビューすることができた生徒もいた。グループ内でのインタビュー結果の発表は、質問事項をそれぞれの生徒が一つ選んで発表した。生徒は自分の調査結果との違いに興味をもちながら、グループの友達の発表を聞いていた。



【インタビュー活動の様子】



【グループ活動の様子】

#### (4) 事後アンケートの実施

Unit 5の単元終了後、第1学年57名に対し、英語の授業についてのアンケートを行った（平成29年9月実施）。

##### ① 英語の授業は好きですか。（5月比）

はい○	いいえ×	どちらでもない△
59.6% (-10.6%)	19.2% (+6.9%)	21.2% (+3.7%)

(主な記述)

○分かりやすくておもしろいから。

×文を作ったりすることが難しいから。単語を覚えることが難しいから。

△英語は嫌いじゃないけど、単語を覚えたり文を書いたりすることが難しいと思うから。

##### ② 『Hi, friends!』のデジタル教材を使った外国語活動の復習は分かりやすかったですか。

はい○	いいえ×	どちらでもない△
70.2%	8.7%	21.1%

(主な記述)

○小学校の時には分からなかったことが理解できたから。文法が分かったから。

×小学校のことをあまり覚えていなかったから。

△簡単すぎて、中学校の教科書だけでいいかなと思ったから。

質問項目①では、5月に行ったアンケートの結果に比べて、「好き」と答えた生徒が減少し、「いいえ」または「どちらでもない」と答えた生徒が増えている。記述回答によると、英語自体は好き

だが、単語や英文を正確に書くことが求められるということが負担となっているようである。また、単元が進んだことによって習得すべき語彙が増加するとともに、定期考査では英語を正しく書くことが求められるなど、外国語活動や中学校入学初期の学習内容との違いも大きいと言える。質問項目②では、『Hi, friends!』のデジタル教材を用いた外国語活動の復習について、70.2%の生徒が分かりやすかったと答えている。記述回答では、「いいえ」と答えた生徒は、「小学校での外国語活動の内容をあまり覚えていなかったから」と答えた生徒が多かった。また、「どちらでもない」と答えた生徒の多くは、「復習の内容が簡単すぎた」と回答した。

## 7 成果と課題

### (1) 仮説の検証

事後アンケートの質問項目②の結果から、デジタル教材を用いて小学校外国語活動の復習をしたことで、慣れ親しんだことのある英語表現が新出の文法事項の学習への心理的な負担を和らげ、生徒にとって無理のない学習となった。また、記述回答の中に、「小学校で使っていた英語が、どうしてその言葉の順番になるのかや、単語の一つ一つの意味を教えてもらえて納得できた」という意見があったことから、大変有効であったと考える。

しかし、身に付いたかどうかという点については、聞いたり話したりする活動については、意味を理解して学んだ表現を、積極的に使う姿が見られたものの、事後アンケートの質問項目①の記述からも分かるように、単語や英文のつづりを正確に「書くこと」については、生徒の苦手意識も強く、定期考査の解答でも誤りが多い。

### (2) 今後の課題

小学校外国語活動の中で、生徒が音声で慣れ親しんだ英語を文字としっかりと結び付け、正確に書く力を伸ばす指導の工夫が求められる。英語を聞いたり話したりすることはできても、それを文字で正確に書くとなると、抵抗感をもつ生徒も多い。新学習指導要領の施行により、小学校3年生から始まる外国語活動と、5年生から始まる外国語科の学習で身に付けた表現を、中学校の外国語科の指導の中で、これまで以上に「書くこと」の技能へつなげる手だてを探っていきたい。また、自校の中学校区の小学校で、どのように外国語活動や外国語科の授業が行われているのかを、授業参観等を通して把握しておく必要がある。特に、中学校区に複数の小学校がある場合は、それぞれ小学校での学習状況の違いに配慮する必要がある。

## 8 参考文献等

- 文部科学省『小学校学習指導要領』平成29年3月公示
- 文部科学省『中学校学習指導要領』平成29年3月公示

# ☆Survey☆

## Q1. What do you want?

	a dokodemo door 	a takekopta 	a time machine 	a honyaku konnyaku 	others
myself					
classmates					

## Q2. What do you study on Fridays?

	English 	science 	math 	nothing 	others
myself					
classmates					

## Q3. What do you have for breakfast?

	toast 	bread 	rice 	steak 	others
myself					
classmates					

## 実践報告 3

## CAN-DO リストの活用と授業目標の工夫

## ー学習意欲の向上を目指してー

県立豊野高等学校 教諭 清水 雅史

## 1 はじめに

CAN-DO リストの作成によって、各校で生徒の学習到達目標が設定された。これによって、授業内のコミュニケーション活動が活性化され、パフォーマンステストなどにより、生徒自身も教員も生徒の英語力を客観的に測れるようになり、4技能（5領域）の育成のための目標設定もしやすくなった。

しかし、本校の現状は、日頃の英語の授業におけるコミュニケーション活動の目的が明確でなく、パフォーマンステストの内容や方法においても、CAN-DO リストの学習到達目標を達成させるための工夫はするものの、3年間を見通した実施には至っていない。

そこで本実践では、CAN-DO リストの活用を通して、生徒の英語学習への意欲を高めさせる方策を探ることとした。本校生徒の大半は英語を不得意とするが、苦手意識を克服し、英語学習に対して前向きな姿勢を身に付けさせ、生徒の学力向上と英語によるコミュニケーション能力の育成を図りたいと考えた。

## 2 生徒の実態

本校第1学年の生徒120名に対し、英語に関する調査を3回実施した。1学期中間考査後（平成29年5月）に初回を実施し、中学時代に関する内容も併せて調査した。

## ① 英語は好きですか。

	好き	やや好き	あまり好きでない	好きでない
中学時代	12.0%	33.3%	35.0%	19.7%
1学期中間考査後	<b>20.5%</b>	<b>42.7%</b>	26.5%	10.3%

## ② 英語は得意ですか。

	得意	やや得意	あまり得意でない	得意でない
中学時代	6.8%	21.4%	33.3%	38.5%
1学期中間考査後	6.0%	33.3%	47.0%	13.7%

## ③ 伸びたと思う技能（複数回答可）

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
中学時代	23.9%	7.7%	30.8%	29.9%
1学期中間考査後	13.7%	<b>27.4%</b>	23.1%	21.4%

## ④ 今後特に身に付けたい技能を一つ選びなさい。

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
1学期中間考査後	16.2%	<b>41.0%</b>	9.4%	<b>33.4%</b>

### (1) 調査結果について

まず、中学時代の英語学習について、質問①②の回答から、英語に対して苦手意識を感じていた生徒が多いことが浮き彫りとなった。また、質問③の回答から、中学時代に英語を話す力が伸びていないと感じている生徒が多いということも分かった。

1学期中間考査後について、質問①の回答から、英語を前向きに捉える生徒の割合が60%以上いることが分かった。また、質問③の回答から、入学して1か月ほどであったが、話す力が身に付いたと感じる生徒がおよそ20%増加したこと、質問④の回答から、「話すこと」「書くこと」といったアウトプットの技能を伸ばしたいと感じる生徒が大半であることが分かった。

### (2) 結果の分析

1か月程度の短い期間で、入学当初よりコミュニケーション活動を積極的に行ってきたことにより、英語に対する意識を多少改善することができたと考える。特に、コミュニケーション活動を積極的に行っているクラスでは英語に対する意識の改善が顕著であった。実際に英語が「好きだ」と回答した生徒の理由をアンケートの記述欄で確認すると、多くの生徒が「授業が楽しい」「分かりやすい」と回答していた。授業内でのコミュニケーション活動が、生徒の英語に対する前向きな姿勢や学習意欲の向上につながる大きな要因であったと考えられる。

そこで、3年間の学習到達目標や単元の目標を示すことにより、生徒に見通しをもって英語学習に取り組ませ、学習意欲の向上につなげようと考えた。

## 3 研究の目的

1年終了時の学習到達目標の達成に向けて、各単元の位置付けを確認し、毎回の授業の目標を明確にすることで4技能をバランスよく育成する。また、生徒にとって「楽しい授業」とは、どのようなものであるのかを検証・考察し、生徒の充実感や達成感につながる指導の在り方を探る。

## 4 研究の仮説

研究の目的を達成するために、次のような仮説を立てて検証することとした。

仮説1：CAN-DO リストと単元の目標をリンクさせ、毎回の授業で目標を整理して伝えることで、生徒の学習意欲の向上につながるであろう。

仮説2：授業でのコミュニケーション活動や、パフォーマンステストによるフィードバックを充実させることで、学びの楽しさや達成感につながる指導が可能になるであろう。

## 5 研究の方法と内容

研究の仮説を検証するため、コミュニケーション英語 I の授業を中心に、以下の方法で実践を行うこととした。

### (1) CAN-DO リストと単元目標を明確にする手だて

ア 豊野高校 CAN-DO リストについて…資料B (p. 9 参照)

(ア) 生徒全員に配付する。

(イ) 言語活動を行う際に、必ず4技能の該当項目を確認させる。

イ 単元の目標・観点別評価一覧について…資料A (p. 8 参照)

(ア) 各単元の始めに、生徒全員に配付する。

(イ) 授業の始めに、生徒に目標を確認させる。

(ウ) (イ)の際に、CAN-DO リストの関連項目について教員が説明し、つながりを意識させる。

## (2) 言語活動を充実させるための手だて

### ア コミュニケーション英語 I

(ア) 「コミュニケーションカード」を用いたペア・ワーク…資料C (p.10 参照)

(イ) 各パートの要約を作成・発表するグループ・ワーク…資料D (p.10 参照)

(ウ) グループ・ワークによる意見の発表…資料E (p.10 参照)

- ① もち寄った意見をグループ内ですり合わせて、発表内容を作成させる。
- ② 各グループで発表する。
- ③ 評価シートに、自己評価及び相互評価を記入させる。

### イ 英語表現 I

毎回テーマを与えて英作文を書かせる。

### ウ パフォーマンステストの実施

ペアによる会話（英語によるやり取り）

## (3) アンケートによる生徒の意識変化の調査

### ア 実施時期

1学期中間考査後（5月）、1学期期末考査後（7月）、2学期中間考査後（10月）

### イ 主な調査内容

英語が好きな度合い、英語が得意な度合い、生徒が伸びたと実感する技能

## 6 授業実践

1 単元名 Lesson 3 Yanase Takashi : The Creator of Anpanman			
2 単元の目標 アンパンマンについて、作成から人気を博すまでの過程を理解し、やなせたかし氏のヒーロー像に迫る。 グループで説得力のあるプレゼンテーションを作成・発表することができる。			
3 単元の評価規準			
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
本文について、ペア・ワークで自分の意見を伝えたり、相手の発表を理解したりしながら聞いたりする。	本文中の表現を他の表現で言い換えたり、写真やイラストを英語で説明したりすることができる。	本文を読み、概要や要点を理解することができる。	受動態, SVOO, SVOC, SVO (O=that-節, wh-節, 疑問詞+to 不定詞)の用法を理解している。
4 単元の概要と言語活動 本単元は、「アンパンマン」が人々に受け入れられるに至った経緯について、やなせ氏の生い立ちを踏まえて書かれている。本文の内容を英語で要約したり発表したりすることで、魅力的なキャラクターについてグループで考えさせ、英語によるプレゼンテーションを行うことで相手に伝える力を養う。			

【単元のCAN-DO】

話すこと		書くこと		聞くこと		読むこと	
学習到達目標	評価方法	学習到達目標	評価方法	学習到達目標	評価方法	学習到達目標	評価方法
・アンパンマンのキャラクターについて、アイコンタクトを意識しながら相手に分かりやすく発表することができる。	・プレゼンテーション	・アンパンマンのキャラクターについて、50語程度のまとまった英文で記述できる。	・ワークシート	・音声を聞いて概要を理解できる。	・本文 T/F 問題 ・プレゼンテーション	・本文の速読や精読を通して、内容を把握できる。	・補助教材(ベーシックノート)

5 単元の指導計画（全8時間） ※1時間：50分

段階 (時数)	学 習 活 動 (生徒)	言語活動に関する指導上の留意点 (教員)
第1次 (1)	【イントロダクション】 ・ペアでの会話活動	・アンパンマンのキャラクターに成り切らせて、会話活動を行わせる。
第2次 (5)	【各パート内容理解】 ・音声による本文の概要把握 ・速読による T/F 問題の確認 ・キーワードの意味の類推  【自分の考えの発表】 ・日本語での要約⇒英語での書き出し ・ペアでの発表練習	・前後の文脈を意識しながらキーワードの意味をグループで類推させる。 ・文構造などを適宜伝えながら類推のヒントにさせる。
第3次 (2)	【プレゼンテーション】 ・アンパンマンを助けられる最適なキャラクターをグループで一つ選び、オリジナリティを交えて説得力のある英語のプレゼンテーションを作成する。 ・単元の CAN-DO を意識してグループ内で発表の練習をする。 ・グループのメンバー全員が別のグループにおいて交代で発表する。 ・聞き手は発表者の評価を評価シートに記入する。発表者は CAN-DO 項目を意識して自己評価をする。	・アンパンマンが窮地にある状況を設定し、単元の始めに配付した登場キャラクターの一覧から選ばせる。 ・説得力をもたせるように、選んだキャラクターの特徴などを具体的に書かせる。 ・単元の CAN-DO のポイントを事前に説明し、発表時に意識させる。ALT にも評価で協力してもらおう。 ・発表後に生徒同士で評価させ、一番よかったグループを選ばせ、その理由を述べさせる。

## 6 コミュニケーション活動の充実の工夫

本単元では、「読むこと」「書くこと」「話すこと」「聞くこと」を有機的に結び付けることをねらいとしている。特に、プレゼンテーションでは自分の考えを明示した上でその理由や具体例を述べるなど、構成上の工夫をすることで、論理的に表現する力を養うことを目標とする。

### 【第3次の学習活動と留意点】

- ①〈書く内容を明確にする〉グループでアンパンマンを助けられる最適なキャラクターを選ぶ。
- ②〈アウトラインを作る〉なぜ最適であるのか理由を具体的に書き出す。
- ③〈発表の形にして書く〉つながりを示す語句を利用して論理的な構成となるように作成する。
- ④〈グループ内で発表の練習をする〉書いた内容をグループ内で互いに読み合い、読み手に伝わりにくい点を中心に指摘し合う。その際、内容を伝える上で支障があるような誤りについて取り上げ、クラス全体で共有する。
- ⑤〈書き直す〉他の生徒から指摘された点について再考させることで気付きを促し、書いた内容を推敲する。最終的にグループで一つの発表を作り上げる。
- ⑥〈発表する〉聞き手に伝わるように発表を行うことを意識させる。CAN-DO リストの学習到達目標についても説明し、話し手も聞き手も目標を意識しながら活動する。各グループから発表者を選出し、他のグループへ移動して発表する。発表後に他のグループから評価をもらい、改善点を自分のグループのメンバーに伝える。次の発表者はその改善点を自分の発表につなげる。このようにして、グループ内で発表者を交代しながら全員の生徒が2～3回発表できる機会を設ける。

## 7 研究の実際と結果の考察

### (1) 実践中の様子

右の写真は、第1次において質問カード (p.10 **資料C**) を基にペアを交代しながら行った会話活動の様子である。毎回1組のペアに発表させ、1学期末にはこれを基にパフォーマンステストを行った。1学期当初は質問に答えるだけであったが、1学期末には、表現に困っても笑顔で会話を続けられるようになった。その後、相手の質問に必ず **Yes, but ...** と答えるような条件を加えて活動を繰り返すことで、より多くの情報を付加できるようになり、会話がいつそう弾むようになった。



【ペアで会話を続ける様子】

また、右の写真は、第3次における**資料E** (p.10) を用いたグループ活動の様子である。最初に CAN-DO リストの「あらかじめ、自分の考えや説明をまとめ、それを聞き手に伝わるように発表することができる」という目標を提示したことで、グループで考えを出し合い、説得力のある内容や聞き手にとって分かりやすい表現を工夫していた。また、ルーブリックを意識して発表の練習をする姿も見られた。生徒の感想からは、「内容が各班全然違っていておもしろかった」「英語の発表を聞きながら笑ってしまうほどでした」等、前向きな感想が多数見られた。一方で、「次回はもっとアイコンタクトやオリジナリティにも工夫したい」「表現をもっと聞いて分かりやすい発表にしたい」等、今回の CAN-DO を意識した振り返りも見られた。



【グループ活動の様子】

## (2) 生徒アンケートの結果分析

2学期中間考査後（平成29年10月実施）までの3回の調査結果は以下のとおりである。

### ① 英語は好きですか。

	好き	やや好き	あまり好きでない	好きでない
1学期中間考査後	20.5%	42.7%	26.5%	10.3%
1学期期末考査後	<b>35.6%</b>	<b>50.0%</b>	12.7%	1.7%
2学期中間考査後	<b>31.5%</b>	<b>50.0%</b>	16.0%	2.5%

### ② 英語は得意ですか。

	得意	やや得意	あまり得意でない	得意でない
1学期中間考査後	6.0%	33.3%	47.0%	13.7%
1学期期末考査後	<b>11.0%</b>	<b>55.1%</b>	28.8%	5.1%
2学期中間考査後	<b>11.0%</b>	<b>51.7%</b>	32.2%	5.1%

### ③ 伸びたと思う技能（複数回答可）

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
1学期中間考査後	13.7%	27.4%	23.1%	21.4%
1学期期末考査後	12.8%	<b>39.3%</b>	<b>39.3%</b>	<b>33.3%</b>
2学期中間考査後	12.7%	<b>39.0%</b>	<b>33.9%</b>	<b>38.1%</b>

### ④ 今後特に身に付けたい技能を一つ選びなさい。

	聞くこと	話すこと	読むこと	書くこと
1学期中間考査後	16.2%	41.0%	9.4%	33.4%
1学期期末考査後	18.8%	37.6%	13.7%	29.9%
2学期中間考査後	18.6%	36.5%	7.6%	37.3%

### ⑤ 学習の到達目標や CAN-DO リストの提示は学習意欲の向上につながりましたか。

	つながった	ややつながった	あまりつながっていない	つながっていない
1学期期末考査後	27.7%	55.5%	14.3%	2.5%
2学期中間考査後	27.1%	51.7%	20.3%	0.9%

質問①②の回答から、英語が「好き」「やや好き」、「得意」「やや得意」と答える生徒が大幅に増えた。質問③の回答から、「話すこと」「読むこと」「書くこと」において、それぞれ10%以上上昇した。質問④の回答から、「話すこと」「書くこと」を伸ばしたい割合が依然として高い。質問⑤の回答から、学習の到達目標や CAN-DO リストの提示を学習意欲の向上につなげている生徒の割合が約80%である。

質問①②の回答の理由としては、1学期と同様に「授業が楽しいから」という意見が多数を占めた。質問③④については、コミュニケーション活動やパフォーマンステスト等を通して、積極的にアウトプットさせてきたことが、結果の改善につながっていると考えられる。質問⑤の自由記述部分で、多数の生徒が「目標が明確化されて授業や学習に集中しやすい」と回答した。また、「目標を達成しよう

という意欲が湧く」「何をどのように頑張れば、評価が上がるのかが分かりやすい」という答えも一部に見られた。

### (3) 実践のねらいと達成状況

#### ア 授業目標の設定と学習意欲の向上

質問⑤の回答から、授業の目標の設定と明示が、生徒の学習意欲の向上に大きく関わっていることが分かった。パフォーマンステスト時に、ルーブリックを提示したり、振り返りを行ったりすることを通して、評価やフィードバックの工夫を更に進めるだけでなく、考査を出題する際にも、その内容が授業の目標とつながっているかを確認する必要があると改めて感じた。

#### イ 言語活動と CAN-DO リスト

生徒の活動の様子を観察していると、読解や聞き取りで内容を理解できることよりも、発した英語を相手に理解してもらう時の喜びの方がとても大きいようである。活動を通して達成すべき4技能の目標が CAN-DO リストによって明確になり、向上心をもってコミュニケーション活動やパフォーマンステストに取り組み、その評価としてフィードバックを受けられたことで、英語学習に対する見通しや前向きな姿勢が生まれたことが、「授業を楽しい」と感じている理由と考えられる。

#### ウ 授業の楽しさについて

2学期中間考査後のアンケートの自由記述部分で、英語の授業の楽しさについて尋ねたところ、約4割の生徒が「コミュニケーション活動ができること」と答えた。一方、教科書の内容を「仲間と協力して理解できること」と答えた生徒も約4割であった。アウトプットを中心とした活動だけでなく、内容を理解できたという達成感をもたせることで、英語学習への意欲を高めさせることができるということが分かった。

## 8 成果と課題

### (1) 仮説1の検証

授業の始めに目標を示して、「何ができるようになるのか」「どのような力を身に付けるのか」ということを意識させることが、生徒の学習意欲の向上に効果があることを確認できた。

### (2) 仮説2の検証

生徒アンケートの結果から、生徒はコミュニケーション活動への取組に楽しさを感じるだけでなく、主体的に英語を発し、ルーブリックを基に目標を達成しようと努力するプロセスで、達成感や充実感を得ていることを確認できた。目標設定に基づく言語活動と、その評価やフィードバックに基づく振り返りと次の目標設定というサイクルがあることで、生徒は、学びへの「やりがい」や「楽しさ」を実感することができる。CAN-DO リストの果たす役割の大きさも確認できた。また、「理解する楽しさ」も重要であると再認識できた。初見の英文をグループ・ワークを通して理解し、理解できた達成感や喜びを共有することで、学びの楽しさを実感できると考えられる。

### (3) 今後の課題

本実践を踏まえ、定期考査の内容を観点別に精査し、生徒に自己の不足している力を客観的に把握させ、次の学びの段階に向かわせるようにしたい。3回目の調査(平成29年10月実施)で、「授業が楽しい」と記述した生徒の学習意欲を更に高めさせられるような、指導と評価の在り方を考えていくことが今後の課題である。

Lesson 3 Yanase Takashi: The Creator of Anpanman

【単元の目標】

- ① アンパンマンの作成から人気を博すまでの過程を理解し、やなせたかし氏のヒーロー像に迫る。
- ② グループで説得力のあるプレゼンテーションを作成・発表することができる。

I. コミュニケーションへの関心・意欲・態度

- ① アンパンマンややなせたかし氏、または自分の好きなマンガなどについて、知っていること・思っていることを発言しようとする。
- ② 本文を読んだ後に、ペア・ワークを通して自分の意見を言ったり、相手の発表をしっかりと聞きこうとしたりする。

II. 外国語表現の能力

- ① 受動態, SVOO, SVOC, SVO(O=that-節, wh-節, 疑問詞 + to-不定詞)を用いて、正しい文を書くことができる。
- ② 各パートの内容を簡潔にまとめて話す／書くことができる。
- ③ 本文中の表現を他の表現で言い換えたり、紙面中の写真・イラスト等を英語で説明したりすることができる。

III. 外国語理解の能力

- ① アンパンマンの「通常のヒーローとは異なる」特徴について理解できる。
- ② やなせ氏が、アンパンマンを生み出した経緯と初期に受けた批判について理解できる。
- ③ やなせ氏が誰から評価を受けて、どう感じたかについて理解できる。
- ④ 関連する英語を聞いて、理解することができる。また、正しく発声することができる。

IV. 言語や文化についての知識・理解

- ① 受動態, SVOO, SVOC, SVO(O=that-節, wh-節, 疑問詞 + to-不定詞)の用法を理解している。
- ② 『アンパンマン』に込められたやなせ氏の「真のヒーロー」についての思いを理解している。

資料B

豊野高等学校 CAN-DO リスト

	1年生	2年生	3年生
話す	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 身近なテーマについて、相手に質問をし、答えることができる。</li> <li>● あらかじめ自分の考えや説明をまとめ、それを聞き手に伝えるように発表することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 質問に対して答えるとき、何か新しい情報を付け加えることができる。</li> <li>● さまざまなテーマについて、文章の流れや聞き手への分かりやすさを意識しながら原稿をまとめ、発表することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 質問に対して答えるとき、新しい情報を加える、相槌を打つ、質問を返すなどをし、会話を発展させることができる。</li> <li>● ディスカッションなどで自分の役割を意識し、場に応じた英語をその場で考えて発話できる。</li> </ul>
書く	<ul style="list-style-type: none"> <li>● ブレーンストーミングができる。</li> <li>● 文法的な間違いを恐れず、英文を書くことに親しむことができる。</li> <li>● 身近なテーマについて、Topic Sentence, Reason 1, Reason 2, Reason 3 (Counter Argument), Conclusion の5文以上で自分の意見を書くことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● さまざまなテーマについて、文と文のつながりを示す語句に注意し、また客観的な理由を述べながら、100語程度で自分の考えをまとめることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● さまざまなテーマについて、自分の考えや関連する情報を基に、150語程度で論理的な文を書くことができる。</li> <li>● 教科書等で習った英文に関して、自分でまとめ直し、要約文を書くことができる。</li> </ul>
聞く	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 短い対話文やスピーチを聞いて、情報や考えなどを大まかに理解することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 対話文を聞いて、話の要点を理解することができる。</li> <li>● アナウンスやニュースのようなある程度まとまった内容の要点を理解することができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 対話文や、まとまった内容の英文を聞き、必要な複数の情報を聞き取ることができる。</li> <li>● 英語で聞き取った情報を基に、その後の展開を推測したり、答えを導き出したりすることができる。</li> </ul>
読む	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 未知の語があっても、英文を読み通すことをあきらめず、とばしたり意味を推測したりしながら、文章全体の大まかな内容を把握することができる。</li> <li>● 簡単な問題 (T or F 問題等) を解くのに必要な根拠となる箇所を見つけることができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 速読で本文の内容をある程度理解できる。</li> <li>● 前後の文脈から、未知語の意味を類推して英文を読むことができる。</li> <li>● パラグラフリーディングを意識し、段落ごとのまとまった意味を考えながら読むことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 速読で本文の内容をほぼ理解できる。</li> <li>● 論理性のある文章を読むときに、Topic Sentence や Reason, Counter Argument 等を意識しながら、文章全体の構成を把握することができる。</li> <li>● 必要な情報を、英文の中から短時間で正確に見つけることができる。</li> </ul>

資料C

(42). Do you think studying is important?



(47). Can you play the piano?



(53). Can you cook?



資料D

Lesson 3 Part1 Yanase Takashi: The Creator of Anpanman

Summary
In Japanese
In English
Which do you like better, Anpanman or Baikinman? Why?

資料E

*If you don't help Anpan-man, I will*



The following is the message from Anpan-man:

"I'm in a big trouble. I am fighting against Kori Oni ( an Ice Demon : 氷鬼) and I hurt myself. Now Anpanman-go(アンパンマン号) is broken, so Uncle Jam(ジャムおじさん) cannot help me. So, I need someone to help me!!"

Question: Which is the best character to help Anpan Man?

1. Choose the best character from the characters list (or Make an original character).
2. What can the character do? You can make an original and useful skill.
3. Make the best presentation in your group and Win!

Character's Name	
What can the character do?	

Presentation

< Evaluation Points >

1. Eye Contact

A よく顔を上げている      B 顔を上げようと努力している      C ほとんど上がらない

2. Voice

A 聞き取りやすい      B 所々分からない      C 聞き取りづらい

3. Contents (内容)

A 分かりやすい      B よい      C 分かりづらい

4. Impression (全体的な印象)

A 大変よい！      B 結構よかった！      C もうひとがんばり！

< Evaluation Sheet >

Make a circle for each articles for the speakers.

Group Name			
1 Eye Contact	A B C	A B C	A B C
2 Voice	A B C	A B C	A B C
3 Contents	A B C	A B C	A B C
4 Impression	A B C	A B C	A B C
Comments			

<Self-Evaluation>

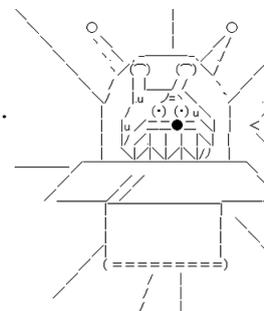
Write 3 POINTS about your presentation:

One is about today's looking back: good points and not-good points.

The second is about next goals.

The third is free comments.

You can write in Japanese (or English).



## 実践報告 4

# CAN-DO リストの活用を通じた指導と評価の工夫

## —英語学習への動機付け—

県立惟信高等学校 教諭 北川 博丈

### 1 はじめに

#### (1) 本校の現状

本校は全校生徒 1,000 名余りが通う普通科の進学校である。入学する生徒の多くが中学校の段階で英語に対して苦手意識をもっている。年度当初、英語表現 I を担当している生徒 40 名にアンケートを実施したところ、全体の 90% が英語に対して苦手意識をもっていると回答した。そうした生徒からは「何が分からないのかが分からない」や「どのように学習を進めていくべきかが分からない」といった意見が多くあった。また、担当生徒 40 名の平日の平均家庭学習時間は 16.4 分で、家庭学習の習慣が十分に身に付いていないことが明らかとなった。

本校は、平成 25 年度から 27 年度まで文部科学省の「多様な学習成果の評価手法に関する調査研究」に取り組んだ。その研究後も、授業内の言語活動や、ルーブリックを用いて評価を行うパフォーマンステスト（スピーキング、ライティング）を中心とした取組を継続している。

#### (2) 本校英語科の抱える課題

本校生徒の 6 割以上は大学進学を目指しており、授業内の言語活動やパフォーマンステストに真剣に取り組んでいる。しかし、そういった英語科の授業改善や評価方法の工夫が、全ての生徒の英語力の向上を必ずしも保障できていない点が課題である。

また、上述の文部科学省の研究をきっかけとして、生徒に身に付けさせる力を明確にするために、県内の他校と比べて早い時期から、当時の英語科主任を中心に教科会で議論を重ね、CAN-DO リストを作成した。それ以降も若干の加筆や修正を加え、現在に至っている。しかしながら、本校の英語科教員 13 名にアンケートをとったところ、CAN-DO リストを有効活用していると答えた教員は 13 名中 3 名であった。まずは教員が CAN-DO リストに関して共通理解を図り、その活用法を明確にしていく必要がある。その上で授業や評価の改善を行い、生徒に自分の成長を実感させ、次の目標へ向かわせながら、自律した学習者を育てていくことが課題である。

### 2 研究の目的

高等学校学習指導要領の趣旨を踏まえ、生徒のコミュニケーション能力の向上を目指した指導と評価の在り方について研究する。特に本校の CAN-DO リストや單元ごとの CAN-DO を活用し、生徒自身に学習の到達度を把握させ、学習に対する自律的関与を促し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育む。またその成果を教員間で検証し、言語活動、評価法等の改善を図る。

### 3 研究の仮説

研究の目的を達成するために、次のような仮説を立てて検証することとした。

仮説1：「学習到達目標の提示→指導→評価→軌道修正」というサイクルを繰り返すことにより、英語学習への自立的関与が見込まれるであろう。

仮説2：指導の中で言語活動を工夫して行うことで、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することができるであろう。

#### 4 研究の方法

- (1) 「英語表現 I」において、本校の CAN-DO リストを基に單元ごとの CAN-DO を作成する。
- (2) 單元ごとの CAN-DO をワークシート等で生徒に提示する。
- (3) 授業中の言語活動やパフォーマンステストを通して目標到達に向けての指導を行う。
- (4) それぞれの CAN-DO に対しての評価の方法をループリックで示し、生徒自身に学習到達目標を把握させる。
- (5) 学期ごとに CAN-DO の振り返りをさせ、生徒に自立的学習を促す。
- (6) アンケート調査を行い、生徒の変容を検証する。

#### 5 研究の内容

##### (1) ライティングテストの実施

###### ア 課題の設定、事前指導

“Introduce one of your classmates with 50 words or more.” 「あなたのクラスメイトを 50 語以上で紹介しなさい」という課題を設定する（資料 1）。事前にループリック（p. 3 資料 2）を提示し、どのようなことに注意して英文を書けばよいか確認する。事前指導の中で、質問をつくらせ、それに対する答え方を練習し、互いにインタビューを行う。そこで得られた情報を基に原稿を作成させる。原稿を書かせている間、添削指導を行い、生徒から出た文法事項や表現に関する質問に答える。

##### 【資料 1 平成 29 年度 1 年生第 1 回ライティングテスト 実施要項】

目的	積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度を育成するため、日々の授業で身に付けた表現活動を利用して記述形式で評価することにより、活発な言語活動の一助とする。
対象	1 年生全員
科目	英語表現 I
日程	6 月 5 日（月）から 6 月 23 日（金）までの授業時間内を利用し、実施する。
実施方法	英語表現 I の授業時に各教室で 20 分間（20 点満点）の記述形式で行う。
試験内容	英語でクラスメイトを紹介しよう ※以下の 6 項目を含めること ①名前（またはニックネーム） ②趣味 ③部活動 ④好きな食べ物 ⑤④についての補足 ⑥その他の情報
評価基準	（1）語数（2）構成（3）文法（4）伝わりやすさの 4 点から評価する。
Can Do	【書くこと①】簡単な語や基礎的な表現を用いて、身近なこと（好き嫌い、家族、学校生活など）について短い文章を書くことができる。
その他	各授業担当者が監督、採点を行う。辞書の持ち込みは不可。 <b>50 語</b> 以上書くことを原則とする。白紙の場合は評価しない。事前に生徒に対して、説明プリントを配り、評価基準を伝えておく。テスト結果は後日返却する。

【資料2 平成29年度 1年生第1回ライティングテスト ルーブリック (評価基準表)】

評価項目	評価基準			SCORE
語数	50語以上	30語以上 50語未満	30語未満	
	5	3	0	
構成	6項目全てについて書かれている。	6項目のうち、4～5項目について書かれている。	6項目のうち、3項目以下についてしか書かれていない。	
	5	3	0	
文法	文法的な誤りやスペルミス等がほとんど見られない。 (3箇所程度まで)	文法的な誤りやスペルミス等がやや見られる。(4～6箇所程度まで)	文法的な誤りやスペルミス等が目立つ。	
	5	3	0	
伝わりやすさ	文の長さ、単語、語句の使い方が適当で、内容が伝わりやすい。	文の長さ、単語、語句の使い方に、不自然さはあるが、ほぼ言いたいことは理解できる。	言いたいことが明確に伝わらない部分が目立つ。	
	5	3	0	
TOTAL SCORE	/ 20			

イ 実施、評価、事後指導

制限時間 20 分でライティングテストを実施する。辞書や授業内で扱った資料、ワークシート等の持ち込みは禁止する。作文用紙には再度、評価基準を意識させるためルーブリックを添付する。テスト終了後、ルーブリックを使って自己採点による振り返りをさせ、答案とルーブリックを回収する。教員が採点した後、答案を返却し、何ができて何ができなかったかを確認させる。

(2) 授業内の言語活動と評価

「英語表現 I」の授業において、本校の CAN-DO リスト (p. 11 資料 8) を基に単元ごとの CAN-DO を作成する。CAN-DO の目標到達に向けて、言語活動を行う。言語活動については他の担当者と検討し、ワークシートを作成した (p. 4 資料 3)。ワークシートには言語活動を評価するためのルーブリックを添付する。各単元を終えた時点でどのような力を身に付けてほしいかということ事前に生徒に提示するとともに、言語活動を実施した後は必ず評価 (教員による評価、生徒同士による評価、自己評価のいずれか、または複数) を行い、そのつど何ができて何ができなかったかを振り返らせる。さらに、できなかったことをできるようにするための手だてを考え実践させる。このサイクルを教科書の各単元で繰り返し行う。



### (3) 学期ごとの振り返り

各学期の最後の授業で、単元ごとの CAN-DO を含んだ振り返りシート（資料4）を記入させる。それぞれの項目に関して「できる」「ほぼできる」「あまりできない」のいずれかに○を付け、自己評価をさせる。各項目について振り返る際には、より正確に振り返りができるように、参考資料として各学期の授業で扱った内容のダイジェスト版（資料5）を生徒に配付し、それを基に自己評価させる。

#### 【資料4 振り返りシート】

H29 1年生1学期 英語表現Ⅰ 振り返りシート				
1年 組 番 名前		参考資料を見て、該当する箇所○を付けてください		
Questions	Statements	3 (できる)	2 (ほぼできる)	1 (あまりできない)
1	英語で簡単な自己紹介ができる。			
2	日常生活の習慣を簡単な英語で述べるができる。			
3	与えられた語句を使用して位置や場所の説明を英語ですることができる。			
4	英語のSV, SVC, SVOの文構造の違いを意識して、英文を読むことができる。			
5	クラスメートを紹介する英文を50語以上で書くことができる。			
6	現在進行形を使用して、写真や絵を描写することができる。			
7	基本的な不規則動詞の活用を正しく発音したり、書いたりすることができる。			
8	動詞の過去形を使って、子どもの頃の思い出を簡単な英語で書くことができる。			
9	未来形を使って、自分の予定や、今後起こる出来事などを簡単な英語で話すことができる。			
10	授業中の教師からの英語の指示や説明を理解することができる。			
11	教師の話す英語を聞き、発音、アクセント、イントネーションに気を配りながらリピートすることができる。			
12	ペア・ワーク等で、英語でやり取りするときには、相手が聞きやすいようにはっきりした声で発話することができる。			
13	ペア・ワーク等で、英語でやり取りするときには、相手とアイコンタクトをとりながら発話することができる。			
14	ペア・ワーク等で、英語でやり取りするときには、日本語を使わずに積極的に英語で話すことができる。			
15	意味や使い方の分からない単語は辞書で調べ、理解する習慣が身に付いている。			
16	その日の授業をその日のうちに復習する習慣が身に付いている。			
◆上の振り返りシートの結果を踏まえ、1学期の反省と、2学期に向けてやるべきことを記入してください。				
1学期の反省				
2学期に向けて				

#### 【資料5 振り返りシート記入時の参考資料(抜粋)】

### H29 1年生1学期 英語表現Ⅰ Self-Evaluation 振り返りシート参考資料

#### Q1 LESSON0 Introduce yourself!

◆Answer the following questions. (You may use your dictionary.)

- ① What's your name?
- ② What do your friends or family call you?
- ③ Where do you live?
- ④ When is your birthday?
- ⑤ What do you enjoy doing in your free time?
- ⑥ What do you want to do in the future?

◆Give a speech about yourself. (英語で自己紹介)

**INTRODUCTION**

**BODY**

- ① .....
- ② .....
- ③ or ④ .....
- ⑤ .....
- ⑥ .....

● ANYTHING ELSE TO SAY?(その他の情報)

**CONCLUSION (終わりの挨拶)**

**Q2** LESSON 1 A new school year begins

◆Tell your daily schedule in English. (日常生活の習慣を英語で表現する)

EX. I get up at six every morning. I eat breakfast at seven.

I usually get to school at eight.

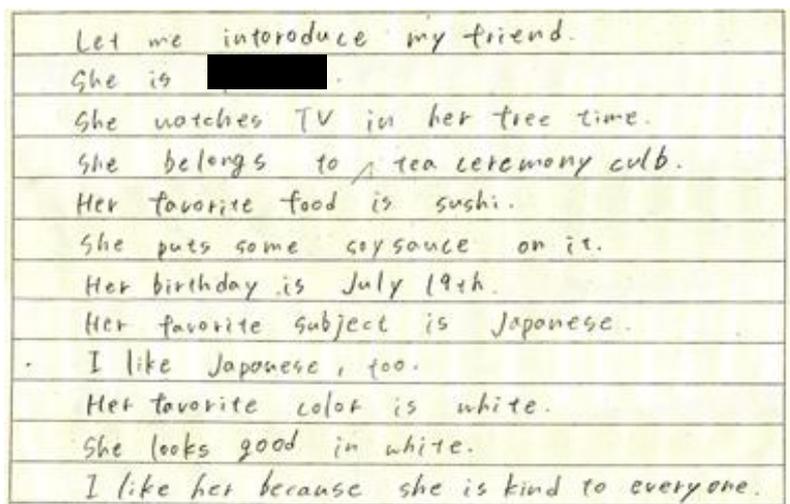
→以下 **Q3** ~ **Q16** まで続く

## 6 研究の実際と考察

### (1) ライティングテストの実施

担当クラス生徒 40 名のテストの得点は、平均点 17.5 点、最高点 20 点、最低点 9 点という結果になった。全体の 9 割以上が 15 点以上をとり、39 名が 50 語以上の英文を書くことができた (1 名のみ 43 語)。このことから、既習の表現を用いて積極的にコミュニケーション活動を図ろうとする態度を育成するというライティングテストの目的を達成したと言える。事前指導の中で、グループでインタビューの質問を考えさせたり、添削指導 (授業中の 30 分を使用) の中で誤りや不自然な表現を直させたりしたことがこの結果につながったと思われる。一方で、三単現の s の付け忘れなどの文法的な誤りや単語のスペルミスなどが多くの生徒の答案に見られた。

### 【資料 6 生徒の作文例① (20 点)】

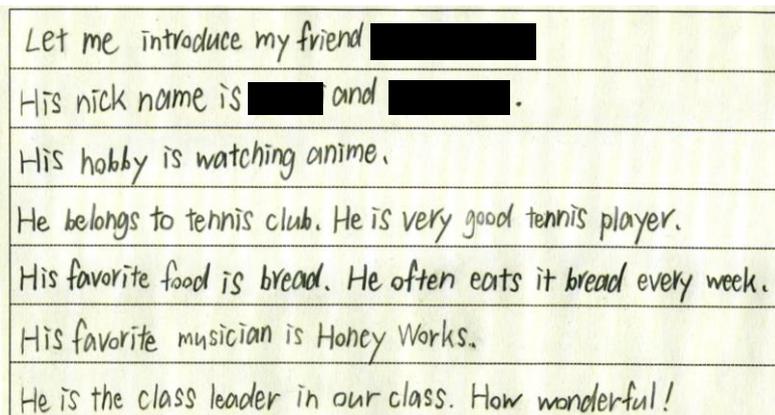


また、テスト終了直後にループリックを使い自己採点をさせたが、生徒 40 名のうち 18 名が、教員が採点したものと同一点数になった。さらに、30 名 (全体の 75%) は教員の採点結果との誤差が 2 点

以内であった。このことから大半の生徒はルーブリックの内容に沿ってどのような紹介文を書くべきかを理解できていたと考えられる。

### 【資料7 生徒の作文例②】

最後に、教員が採点したルーブリックを答案とともに返却した（伝わりにくい表現や誤りにはアンダーラインを引いた）。その場でルーブリックやアンダーラインを引かれた箇所を参考に、何ができて何ができなかったかの確認をさせ、ライティングテストのまとめとした。



#### (2) 授業内の言語活動と評価

##### ア 言語活動の工夫

単元ごとの CAN-DO の目標到達に向けて、それぞれ言語活動を行った。事前に必ず教員からルーブリックを提示し、留意事項（どのような力を身に付けてほしいか）ということをお口頭で説明するとともに、全体の前で活動のモデルを示した。まずは生徒全員が物怖じせず英語を話せるようになることを優先し、特に授業の最初に行うスマールトークなどの言語活動は毎回同じペアで行った。しかし、教員が一度チェックをした原稿を基に会話をする場合などは、生徒が比較的自信をもって話せることができると判断し、いつもとは違うペアで活動を行った。また、なるべく生徒たちが日常生活において直面するような出来事や事柄を基に言語活動の場面設定を行った（例：校内での道案内、悩み事に対するアドバイスなど）。

最初にモデルを示し、毎回同じペアで会話をするにより、生徒たちはおおむね積極的に自信をもって英語でやり取りをすることができていた。自分のことを英語で表現し、相手に伝えたいという意欲は十分に伝わってきた。しかし、タスクのレベルが上がり、負荷がかかると、会話が途中で止まってしまったり、日本語を使用したりするケースが多く見られた。また冒頭説明を英語のみで行うと理解が難しいという生徒も何名かいたため、タスクの内容によっては、1回目は英語で2回目は日本語で行うようにした。

##### イ 言語活動の評価

それぞれの言語活動を実施した後に、何を評価するかに応じて以下の三つのやり方（のいずれか、または複数）で評価を行った。

##### (ア) 教員による評価

生徒による評価が難しいと思われるもの（例：スピーキングにおける発音、イントネーション、ライティングやスピーキングにおける accuracy など）。

##### (イ) 生徒同士による評価

ペア・ワークの中で比較的簡単に評価できるもの（例：相手の声の大きさ、アイコンタクト、発表ややり取りの中で定型表現などを使用しているかどうかなど）。

##### (ウ) 自己評価

自分自身で比較的簡単に評価できるもの（例：ライティングにおける語数や定型表現を使用しているかどうか、ペア・ワークなどにおける自分の声の大きさ、相手とのアイコンタクト、相手の伝えた内容を正確に理解できたかなど）。

生徒たちは、評価をする時も、評価をされてその振り返りをする時も、真剣に取り組むことができていた。特に教員による評価においてはルーブリックで得点を提示するだけでなく、できたことや

できなかったことに関してコメントを付けて示すことが生徒の動機付けにつながると感じた。また、生徒同士による評価の項目に、声の大きさやアイコンタクトを入れることによりそれらを意識させることが徹底できた。自己評価に関しては（p. 4 資料3 ワークシートの例 ◆2）にあるような「相手の伝えた内容を正確に理解できたかどうか」を測る際に有効であった。

### (3) 学期ごとの振り返り

1学期の最後の授業で振り返りシート（p. 5 資料4）とそれまでの授業で扱ったワークシート等のダイジェスト版（p. 5 資料5）を用い、この時点で何ができるようになり、何ができていないのかを自己評価により確認させた。実際にダイジェスト版を見ながらこれまで学習してきたことを思い出し、振り返りを行うことで、「何となく」ではなく、より正確に自己評価をすることができた。また、できていないことをできるようになるために、今後何をしていくべきかを考えさせた。

生徒が振り返りシートに書いた「1学期の反省」のコメント（抜粋）

- ・中学校で習った内容が理解できていないというのが問題だと思う。中学時代に使っていたワークブックで復習することから始めたい。
- ・文法（特に文構造）が理解できていないので、夏休み中に参考書を使って復習し理解していきたい。
- ・物の位置や場所を説明する単語や表現の仕方をほとんど忘れてしまっているので、もう1度（授業で使った）プリントを見直して復習する。
- ・外国の人と英語で最低限の会話ができるようになりたいので、ワークシートを何度もやり直していきたい。語彙を増やすために単語集の例文を使い、単語、熟語をしっかりと覚える。
- ・振り返りシートをやってみると、その時（授業で扱った時）はできていたのに、今はできなくなっていることが多くあった。毎日の授業の復習を30分、その週の復習を週末1時間かけて行い力を付けていきたい。

なお、比較のため、別クラスの40名に振り返りシート（p. 5 資料4）と振り返りシート記入時の参考資料（p. 5 資料5）を配付せず、1学期の反省のみを書かせたところ、あまり具体性のない次のようなコメントがほとんどであった。

- ・定期考査はまあまあできたが、2学期は90点を目指してがんばる。
- ・家庭学習の時間があまり取れなかったなので、2学期からは家で復習する時間をたくさんつくる。
- ・提出物を出せなかった時があったので、2学期からは気を付ける。
- ・英文を読むのが苦手なのでしっかり復習して克服する。

## 7 成果と課題

### (1) アンケート結果（対象生徒：本校1年生 英語表現I 北川担当生徒40名）

※1から3までの質問は4月と10月に実施し、4から6までの質問は10月のみ実施した。

1	英語が苦手である	4月		10月	
		人数	割合	人数	割合
ア	当てはまる	28	70.0%	7	17.5%
イ	やや当てはまる	8	20.0%	14	35.0%
ウ	やや当てはまらない	3	7.5%	8	20.0%
エ	当てはまらない	1	2.5%	1	2.5%

2	英語が嫌いである	4月		10月	
		人数	割合	人数	割合
ア	当てはまる	13	32.5%	3	7.5%
イ	やや当てはまる	15	37.5%	12	30.0%
ウ	やや当てはまらない	7	17.5%	19	47.5%
エ	当てはまらない	5	12.5%	6	15.0%

		4月	10月
3	1日の家庭での英語学習時間(全体の平均)	18.3分	43.8分

4	振り返りをする事で、何ができて何ができていないかを把握することができた。	10月		85%
		人数	割合	
ア	当てはまる	13	32.5%	
イ	やや当てはまる	21	52.5%	
ウ	やや当てはまらない	4	10.0%	
エ	当てはまらない	1	2.5%	

5	振り返りをする事で、今後どのように学習を進めていくべきか分った。	10月		80%
		人数	割合	
ア	当てはまる	7	17.5%	
イ	やや当てはまる	25	62.5%	
ウ	やや当てはまらない	7	17.5%	
エ	当てはまらない	1	2.5%	

6	授業中のペア・ワークやグループ・ワークなどに積極的に取り組んでいる。	10月		100%
		人数	割合	
ア	当てはまる	27	67.5%	
イ	やや当てはまる	13	32.5%	
ウ	やや当てはまらない	0	0.0%	
エ	当てはまらない	0	0.0%	

## (2) 仮説1の検証

アンケート1が示すように4月当初「英語が苦手である」という質問に対して「当てはまる」若しくは「やや当てはまる」と回答した生徒は全体の90%を占めていたが10月には52.5%まで減少した。同じくアンケート2の「英語が嫌いである」という質問に対して「当てはまる」「やや当てはまる」と回答した生徒の割合は4月が全体の70%だったのに対して10月は37.5%にとどまった。またアンケート4が示すように、1学期末に実施した振り返りに関して、全体の8割の生徒が今後の学習の進め方について理解できたと回答している。アンケート3の1日の平均学習時間は、4月と10月の調査を比較すると平均で25.5分増加している。中には家庭でNHKラジオの英語講座を聴くようになった生

徒や、英検を受験するために自分で学習を進める生徒も出てきた。

このことから、「学習到達目標の提示→指導→評価→軌道修正」というサイクルを繰り返すことが、生徒の学習への自律的関与につながるということが分かった。

### (3) 仮説2の検証

アンケート6が示すように、授業中のペア・ワークやグループ・ワークについて積極的に取り組んでいると回答した生徒の割合は、「当てはまる」と「やや当てはまる」を合わせると100%となった。特に英語を話すことに関しては抵抗感がなくなりつつあり、ほとんどの生徒が相手としっかりアイコンタクトを取り、英語で自分のことを伝えようと努力する姿勢が見られるようになった。

このことから、言語活動を工夫して行うことが積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育成することに大きな効果があるということが分かった。

### (4) 今後の課題

減少はしたが、10月時点で全体の約半数の生徒が英語に対して苦手意識をもっていることが分かった。今後も「学習到達目標の提示→指導→評価→軌道修正」というサイクルを継続し、自らの英語力に自信をもちコミュニケーションをとることができる生徒の育成に努めていきたい。特に、中学校レベルの英語でつまずいている生徒に対しては、中学校卒業程度の英語力があれば、話したり、やり取りしたりすることが十分に可能であるということを言語活動を通して実感させ、家庭での文法事項や単語の復習につなげていきたい。そのためには、言語活動の更なる充実が必要である。

本実践の中で使用した單元ごとのCAN-DOや学期ごとの振り返りシートは、生徒の自律的学習の助長に一定の効果があったが、それらは本校のCAN-DOリストを基に作成したものである。実践を通して見えてきた成果と課題を英語科内で共有し、更に実用性の高いCAN-DOリストを作成していくことが今後の課題である。

## 8 参考文献

- 愛知県教育委員会 (2016) 「平成27年度『高等学校における多様な学習成果の評価手法に関する調査研究』研究成果報告書」
- 文部科学省『高等学校学習指導要領』平成21年3月公示
- Brown, J. D. (2012). Developing, using, and analyzing rubrics in language assessment with case studies in Asian and Pacific languages. National Foreign Language Resource Center, University of Hawaii at Manoa

【資料 8 愛知県立惟信高等学校 平成 29 年度用 CAN-DO リスト】

	1 年	2 年	3 年
<p>読むこと</p> <p>Reading</p>	<p>1-1 コミュニケーション英語Ⅰの教科書(1,600語レベル)を読んで、概要や要点を捉えることができる。</p>	<p>2-1 コミュニケーション英語Ⅱの教科書(2,300語レベル)について、速読したり精読するなど目的に応じた読み方ができる。</p>	<p>3-1 コミュニケーション英語Ⅲの教科書(3,000語レベル)について、速読したり精読するなど目的に応じた読み方ができる。</p> <p>3-2 看板、メニュー、携帯メール、簡単なポスターや招待状等の日常生活で使われている非常に短い簡単な文章を読み、理解することができる。</p> <p>3-3 簡単な英語で表現されていれば、旅行ガイドブック、レシピなど実用的・具体的で内容が予想できるものから必要な情報を探することができる。</p>
<p>聞くこと</p> <p>Listening</p>	<p>1-1 かなり配慮して、1文ずつ、ゆっくり話してもらえば、教員による英語での簡単な指示・説明を聴いて理解することができる。</p> <p>1-2 かなり配慮して、1文ずつ、ゆっくり話してもらえば、ごく簡単な英語で話された、事物に関する紹介や対話を聞いて、情報や考えを理解したり、概要や要点をとらえたりすることができる。</p>	<p>2-1 ある程度配慮して話してもらえば、教員に英語での指示・説明を聴いて理解することができる。</p> <p>2-2 ある程度配慮して話してもらえば、簡単な英語で話された、事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりすることができる。</p>	<p>3-1 はっきりとした発音で話してもらえば、教員による英語での指示・説明を聴いて理解することができる。</p> <p>3-2 はっきりとした発音で話してもらえば、分かりやすい展開の、事物に関する紹介や報告、対話や討論などを聞いて、情報や考えなどを理解したり、概要や要点をとらえたりすることができる。</p>
<p>話すこと</p> <p>発表</p> <p>Spoken Production</p>	<p>1-1 英語の授業の中で、教員に簡単な質問をしたり、許可を求めたりすることができる。</p> <p>1-2 絵を見て、風景や状況を、簡単な語や基礎的な句、構文を用い、簡単に描写することができる。</p> <p>1-3 前もって話すことを用意した上で、基礎的な語句、定型表現を</p>	<p>2-1 英語の授業の中で、教員に質問をしたり、許可を求めたりすることができる。</p> <p>2-2 絵を見て、風景や状況を、簡単な語や基礎的な句、構文を用い、複数の文で描写できる。</p> <p>2-3 一連の簡単な語句や文を使って、自分の趣味や特技に触れながら</p>	<p>3-1 英語の授業の中で、教員に質問をしたり、許可を求めたりすることができる。</p> <p>3-2 絵を見て、風景や状況を、既習の表現を用い、複数の文で描写できる。</p> <p>3-3 写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、既習表現を</p>

	1年	2年	3年
	<p>用いて、人前で実物を見せながらその物を説明することができる。</p> <p>1-4 基礎的な語句、定型表現を用いて、限られた個人情報（家族や趣味など）や簡単な情報（時間や日にち、場所など）を伝えることができる。</p> <p>1-5 前もって発話することを用意した上で、限られた身近なトピックについて、簡単な語や基礎的な句、限られた構文を用い、簡単な意見を言うことができる。</p>	<p>自己紹介をすることができる。</p> <p>2-4 写真や絵、地図などの視覚的補助を利用しながら、一連の簡単な語句や文を使って、自分の毎日の生活に直接関係のあるトピック（自分のこと、学校のこと、地域のことなど）について、短いスピーチをすることができる。</p> <p>2-5 一連の簡単な語句や文を使って、意見や行動計画を、理由をあげて短く述べることができる。</p>	<p>使って、自分の毎日の生活に直接関係のあるトピック（自分のこと、学校のこと、地域のことなど）について、自分の意見、考えを交えて短いスピーチをすることができる。</p> <p>3-4 一連の簡単な語句や文を使って、意見や行動計画を、理由をあげて短く述べることができる。</p> <p>3-5 使える語句や表現を繋いで、自分の経験や夢、希望を順序だてて、話しを広げながら、ある程度詳しく語るすることができる。</p>
<p>話すこと やり取り Spoken Interaction</p>	<p>1-1 教員による、英語での簡単な指示に対して簡単な応答をすることができる。</p> <p>1-2 挨拶をはじめとして、簡単なやり取りをかわすことができる。</p> <p>1-3 なじみのある定型表現を使って、時間・日にち・場所について質問したり、質問に答えたりすることができる。</p> <p>1-4 家族、日課、趣味などの個人的なトピックについて、（必ずしも正確ではないが）なじみのある表現や基礎的な文を使って、質問したり、質問に答えたりすることができる。</p>	<p>2-1 教員による、英語での指示・説明に応答することができる。</p> <p>2-2 自分のことなど、なじみのある話題について英語で短いやり取りができる。</p> <p>2-3 基本的な語や言い回しを使って日常のやり取り（何ができるかできないかや色についてのやり取りなど）、において単純に応答することができる。</p> <p>2-4 趣味、部活動などのなじみのあるトピックに関して、はっきりと話されれば、簡単な質疑応答をすることができる。</p> <p>2-5 基本的な語や言い回しを使って、人を誘ったり、誘いを受けたり、断ったりすることができる。</p>	<p>3-1 教員による、英語での指示・説明に応答することができる。</p> <p>3-2 簡単な英語で、意見や気持ちをやり取りしたり、賛成や反対などの自分の意見を伝えたり、物や人を比べたりすることができる。</p> <p>3-3 予測できる日常的な状況（郵便局・駅・店など）ならば、さまざまな語句や表を用いてやり取りができる。</p> <p>3-4 身近なトピック（学校・趣味・将来の希望など）について、簡単な英語を幅広く使って意見を表明し、情報を交換することができる。</p>

	1年	2年	3年
書くこと Writing	<p>1-1 <u>簡単な語や基礎的な表現を用いて、身近なこと（好き嫌い、家族、学校生活など）について短い文章を書くことができる。</u></p> <p>（下線部：本実践と関係する項目）</p> <p>1-2 自分の経験について、辞書を用いて、短い文章を書くことができる。</p> <p>1-3 趣味や好き嫌いについて複数の文を用いて、簡単な語や基礎的な表現を使って書くことができる。</p> <p>1-4 日常的・個人的な内容であれば、招待状、私的な手紙、メモ、メッセージなどを簡単な英語で書くことができる。</p>	<p>2-1 文と文を and, but, because などの簡単な接続詞でつなげるような書き方であれば、基礎的・具体的な語彙、簡単な句や文を使った英語で、日記や写真、事物の説明文などのまとまりのある文章を書くことができる。</p> <p>2-2 身の回りの出来事や趣味、場所などについて、個人的経験や自分に直接必要のある領域での事柄であれば、簡単な描写ができる。</p> <p>2-3 聞いたり読んだりした内容（生活や文化の紹介などの説明や物語）であれば、基礎的な日常生活語彙や表現を用いて、感想や意見などを短く書くことができる。</p>	<p>3-1 自分に直接関わりのある環境（学校、職場、地域など）での事柄について、身近な状況で使われる語彙・文法を用いて、ある程度まとまりのあるかたちで、自分の意見、考えを述べることができる。</p> <p>3-2 身近な状況で使われる語彙・文法を用いれば、道筋を立てて、作業の手順などを示す説明文を書くことができる。</p>
外部指標 <目標>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英検 3 級（全員）</li> <li>・英検準 2 級（5% ; 18 名）</li> <li>・受容語彙：2,000 語</li> <li>* 中学校 (1,200) + コミュ英 I (400) = 1,600 語</li> <li>* 英検 3 級 ≒ 中学卒業程度 (2,000 語レベル)</li> </ul> <p>[身近な英語を理解し、また使用することができる。]</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英検準 2 級（15% ; 45 名）</li> <li>・英検 2 級（1% ; 3 名）</li> <li>・受容語彙：3,600 語</li> <li>* 1 年次まで (1,600) + コミュ英 II (700) = 2,300 語</li> <li>* 英検準 2 級 ≒ 高校中級程度 (3,600 語レベル)</li> </ul> <p>[日常生活に必要な英語を理解し、また使用することができる。]</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・英検準 2 級（40% ; 140 名）</li> <li>・英検 2 級（3% ; 10 名）</li> <li>・受容語彙 5,000 語</li> <li>* 2 年次まで + コミュニケーション英語 III (700) = 3,000 語</li> <li>* センター試験 (4,000 語超)</li> <li>* 英検 2 級 ≒ 高校卒業程度 (5,000 語レベル)</li> </ul> <p>[社会生活に必要な英語を理解し、また使用することができる。]</p>

## 実践報告 5

# 学校段階間の連携に向けたCAN-DOリストの作成及び活用例

## —CAN-DOリストの共有による中高接続の強化—

県立加茂丘高等学校 教諭 小笠原 詠子

### 1 はじめに

本校は豊田市北部に位置する全校生徒 300 名程の小規模校である。平成 26, 27 年度に文部科学省「課題解決に向けた主体的・協働的な学びの推進事業」における「学力定着に課題を抱える学校の重点的・包括的支援に関する調査研究」に取り組み、学校全体で授業改善を進めた。研究指定終了後も校内で「学力向上プロジェクトチーム」を設置し、アクティブ・ラーニングの視点を積極的に取り入れ活用することにより、生徒の思考力、判断力、表現力等を育成するため、研究を継続している。

本実践では、特に英語学習における「中高接続」に焦点を当て、生徒の英語力育成のための指導の在り方を探ることとした。

### 2 生徒の実態

本校に入学する生徒には、中学校時代に英語の学習につまずき、基礎的な学力を定着させることができないまま中学校を卒業してきた生徒が多い。また、全体的に英語学習に対する苦手意識は強く、学習に対する姿勢も消極的である。

### 3 研究の目的

児童生徒の学力を効果的に身に付けさせるためには、指導を各学校段階内において完結するのではなく、学校間連携を推進する必要がある。しかし現在、英語教育においては指導内容や指導方法の接続が密であるとは言い難い。学校段階間の学習到達目標のつながりを明確にした CAN-DO リストの作成・活用を通して、英語指導における学校段階間の連携や接続を密にし、計画的・継続的な一貫した指導を可能とするための方法を模索したいと考えた。

### 4 研究の仮説

研究の目的を達成するために、次のような仮説を立てて検証することとした。

仮説：学校段階間の交流や CAN-DO リストの共有を通じて、学びの接続・連携を図ることは、児童生徒の英語によるコミュニケーション能力の育成に有効であろう。

### 5 研究の方法と内容

研究の仮説を検証するため、以下の方法で実践を行うこととした。

#### (1) 中学校との授業交流や連携事業

ア 情報交換会

#### イ 授業参観

(ア) 中学校教員による高等学校の授業参観

(イ) 高等学校教員による中学校の授業参観

#### ウ 共同での授業モデル作成

### (2) CAN-DOリストの活用

ア 共通 CAN-DO リストの作成

イ 共通 CAN-DO リストの使用

## 6 研究の実際と考察

### (1) 中学校との授業交流や連携事業

#### ア 情報交換会

本校は豊田市北部（旧西加茂郡藤岡町）に位置し、入学する生徒の約半数が旧藤岡町内の豊田市立藤岡中学校、豊田市立藤岡南中学校の卒業生である。そこで両中学校を訪問し、英語科の先生方と情報交換を行った。内容は、中学校での指導内容に始まり、評価の付け方など多岐にわたった。

#### イ 相互授業参観

本校ではここ数年、年2回公開授業週間を設け、全授業を本校保護者・地域関係者・地区の中学校教員及び高等学校教員・中学3年生の保護者に公開している。この期間中に中高連携研究授業を実施し、中学校の先生方にも授業を参観していただき、意見・感想を交換している。

また、高校教員による中学校の授業参観としては、豊田市教育委員会主催の教科領域等訪問指導における研究授業に参加させていただいた。豊田市立藤岡南中学校、豊田市立藤岡中学校共に、本校英語科教員5名が参加し、中学校の実際の授業を参観することにより、高等学校の授業において、中学校での既習事項をどのようにスパイラルアップさせることができるのか考えることができた。また、研究授業後の研究協議会にも出席し、中学校の先生方の取り組んでいる課題について意見を交換した。

#### ウ 共同での授業モデル作成

現在藤岡南中学校の先生方と共同で中学校における授業モデルを作成している。それまでに中学校で取り組んできたことに、本校で取り組んでいる取組の要素を加えることで、両校の取組をより近づける試みである。高校においては、新しく作った中学校における授業モデルをベースに、中学校の学習内容をスパイラルアップさせた授業計画の立案が可能となる。相互に授業を参観するだけでなく、授業計画の作成まで踏み込んだ交流をすることで、より両者の指導の一貫性が高まった。

### (2) CAN-DOリストの活用

#### ア 共通 CAN-DO リストの作成

情報交換、授業参観等により互いの学校の様子は分かるものの、個々の生徒の到達度については正確に把握できていないのが現状である。高等学校新入学生徒に対して行っている「オリエンテーションテスト」を利用し、各生徒の学習到達度を図ることも可能ではあるが、スピーキング力も含めた4技能の到達度を測ることは難しい。

各高等学校で作成している CAN-DO リストのスタート地点と、中学校卒業時の各生徒の到達地点に「断絶」がないか、つまりその接続がシームレスであるかを調査した結果、以下のことが分かった。

- ・ 地区によっては中学校では独自の CAN-DO リストをまだ作成していない。
- ・ 中学校では教科書ベースの CAN-DO リストを使用しているところも多い。
- ・ 中学校は、各高等学校が作成している CAN-DO リストに関する情報を得る機会がない。

この調査結果を踏まえて、児童生徒の個々の学習段階に応じた指導を可能にするため、小学校から高等学校まで継続して使用可能な CAN-DO リストを作成する必要があると判断した。どの学校でも使用できるよう、教科書や教材に左右されず、新学習指導要領の5領域に対応したものを考案した(p. 6 共通CAN-DOリスト案, 資料2参照)。

例えば、スピーキング(発表)における能力は「表現力」と「構成力」に分けた。原稿を作成する場合、作成するための能力は全てライティングに含まれるため、スピーキング(発表)には含まれない。「表現力」の中では、目線や態度、視覚資料の提示方法、またはスピーチの運び方など項目を分けることにより、それぞれの段階で何をどのように指導したらよいか可視化した。また、原稿の準備についてもある程度の長さの原稿を用意する段階から、スピーチプランを立てて発表、その後に即興で発表と積み上げていく。即興で話す段階になり、即興での構成力を図るといったつくりになっている。

これまで作成された CAN-DO リストの多くは、ある時期までに設定された項目に到達できなかった生徒に対し、もう一度その項目に挑戦する機会を与えることが困難であるという問題を内包している。例えば、ライティングにおいて、1年終了時に「趣味や好き嫌いについて基礎的な表現を使って書くことができる」、2年終了時に「関心がある社会の状況についての自分の意見を、専門的でない語彙や複雑でない文法構造を用いて書くことができる」と到達目標を設定した場合、1年終了時にその項目が達成できなかった生徒に対しては、2年時以降に趣味や好き嫌いについて再び書く機会を与えなければならないが、カリキュラムや授業時間の都合から、必ずしもそれが与えられているわけではない。この共通 CAN-DO リスト案ではその点に配慮し、個々の学習到達状況に個別に対応することを可能にした。同時に、それは使用教材の内容や言語材料にも左右されず、どの学校においてもどの教科書であっても達成状況を測ることができる CAN-DO ステートメント(能力記述文)になっている。

作成に当たっては、まずは中学校の先生方との情報交換会において、前述した内容の他に、各中学校で育てたい生徒像、生徒の学習到達度に応じた中学卒業時の目標設定について詳しく聞いた。その後中学校の授業を参観し、生徒のおよその学習到達度や実際の指導の様子を把握し、それを基に共通 CAN-DO リスト案を作成した。

#### イ 共通 CAN-DO リストの使用

平成30年度からの本格的な実施を目指し、現段階では各校で試験的運用を行い、その妥当性を検証している。その結果を反映させ、来年度からはこの共通 CAN-DO リスト案(p. 6 資料2)に基づき、各校で3年間を見通した年間指導計画を作成する。その年間指導計画に基づき、単元構想や授業計画を作成し、授業を行う。生徒の学習到達度にそれぞれ個人により差が出ることは自然であり、到達度別 CAN-DO リストを使用することにより、それぞれの到達目標を明確にすることができる。また、年間学習計画を立てる際には、CAN-DO ステートメントの効果測定についても明示する。その際には、スモールステップを踏むことができるように、段階的な内容を設定する。

例えば、本校1年生の第1学年終了時の学習到達目標は以下の二つである。

- ・ ライティング Grade 6 「与えられたテーマについて、イントロダクション、ボディ、コンクルージョンの三つの段落構成で、30語程度のまとまった英文を書くことができる」
- ・ スピーキング(発表) Grade 6 「Show & Tell などの活動において、写真などを利用して準備されたスピーチを行うことができる」

これらを達成するための指導計画は(p. 4 資料1)のとおりである。

【資料1 コミュニケーション英語 I (使用教科書: All Aboard English Communication I)】

単元	学習内容	効果測定	測定重点項目
Lesson 0 (本校独自ブリッジ教材)	自己紹介, 他者紹介を通じたスピーチの基本	パフォーマンステスト① (個人: 友人紹介) パフォーマンステスト② (グループ: 先生紹介)	声の大きさ 発表態度 伝達度
Lesson 3 Cool Culture from Japan	よいスピーチに必要な項目	パフォーマンステスト (個人: 日本のポップカルチャー紹介①)	語数 目線 視覚資料の使用
Lesson 6 A Funny Picture from the Edo period	スピーチの構成	パフォーマンステスト (個人: 日本のポップカルチャー紹介②)	語数 (構成) 目線 伝達度

一つの単元で全ての効果測定を行うわけではなく、1年間を通じて段階を踏みながら指導する。それぞれの効果測定の重点項目を絞ることにより、段階的な指導を行うことができる。また、一つの効果測定が終了するごとに振り返りシート (p. 10 資料3) を利用し、「今回できたこと」「今回できなかったこと」「次回がんばりたいこと」などの項目について生徒本人に確認させることにより、より細かなステップを踏ませることができる。

## 7 成果と課題

### (1) 仮説の検証

今回の取組を通して、学校段階間の接続・連携をより効果的に行うためには、「ソフト面」「ハード面」の両方からのアプローチが必要であることを再認識した。「ソフト面」に関しては、中高の教員が互いに学校を訪問し合うことで、指導の実際やソフト面での授業交流や連携事業を通じ、中学校での指導の実際や、取り組んでいる課題、目指す生徒像、高等学校に対する要望など、さまざまなことが分かった。中学校から高等学校への接続が円滑に行われるためには、私たち高等学校の教員が中学校の実際について「知ること」が不可欠である。中学校までに生徒が学んできたことの上に、高等学校での学びを積み上げていくため、接続をシームレスに行う努力は高等学校の教員がその大部分を担うべきである。そのため、本校英語科の指導について見直すよい機会となった。

また本実践では、小学校から高等学校までの一貫した CAN-DO リストを作成したが、この検証については来年度以降も継続して実施していく。実際には、CAN-DO リストを新たに作成することが必ずしも必要というわけではない。小学校の CAN-DO リストと中学校の CAN-DO リストを持ち寄り、内容をすり合わせ、また、中学校の CAN-DO リストと高等学校の CAN-DO リストをすり合わせることも有効な方法である。今回協力していただいた中学校の先生方とは、将来育てたい生徒像を共有することにより、共通の見通しをもち指導していくことができるようになるであろう。それをもつことにより、中学校と高等学校の枠を越え、地域で生徒を育成していくのだという、学校段階間の教員のつながりもより深まったように感じる。

### (2) 今後の課題・展望

本実践については、平成 30 年度以降も継続して十分な検証を行いつつ、作成した共通 CAN-DO リ

スト案の有効性についての検証と調整を継続して行っていく必要がある。また、今回は豊田市藤岡地区の中学校と高等学校という限られた範囲内での連携強化を目指したのだが、将来的には連携の範囲を拡大し、近隣の小学校や、豊田市内の他の高等学校との連携も視野に入れていきたい。市内の全ての小・中学校及び高等学校が、同じ CAN-DO リストを使用し、「育てたい生徒像」を共有することができれば、小中高で一貫した目標を実現することが可能になるであろう。

また、本実践以前にも互いの授業を見学し、情報交換する機会があった。しかし、それは不定期なもので、複数の教員で行うものではなかった。本実践においては、定期的に情報交換し、互いの授業の見学をして意見を交換するなどの交流を学校同士で行い、その距離を縮めることができた。個人ではなく、それぞれがチームとして定期的に交流する意義はとても大きい。

## 8 おわりに

前述したように本実践は個人で行ったものではない。本校英語科が中学校の先生方と協力して取り組んできたものである。

CAN-DO リストの一番の利点は、教員全員が育成したい生徒像を共有し、その実現に向けて話し合い、学習到達目標を共有して指導を行うことができることにあると私は考える。中学校と高等学校では物理的な距離もあり、普段から密にやり取りをすることは難しい。しかし、CAN-DO リストを共有し、定期的な交流をもつことにより、より「密」な中高接続を可能にすることができると実感できた。今後もよりよい学校段階間の接続の在り方を模索していきたい。

【資料2 共通CAN-DOリスト 案】

1 スピーキング(発表)

S(P)	上	下	activity	準備	表現力			構成	Can-Do
					Non-Verbal		Delivery		
					eye-contact	その他			
0	小3 小4	小3 小4	挨拶		◎(短い)	◎(短い)	loud and clear	定型表現を使用し、目線を合わせて簡単な挨拶ができる。	
1	小5	小5	発言		◎(短い)			自分のしたいことなどを簡単に短い表現で聞き手に目線を合わせていうことができる。	
2	小5	小6			◎(短い)			限られた範囲内で、伝えようとする内容を整理した上で、簡単に基本的な語句を用いて話すことができる。	
3	小6	中1	short speech		◎(短い)			自分の伝えたいことについて基本的な語句を用いて短いスピーチをすることができる。	
4	小6	中2			◎(短い)			与えられたテーマについて初歩的な英語で簡単なスピーチをすることができる。	
5	中1	中3	self introduction	script	50%			<ul style="list-style-type: none"> <li>準備されたスピーチを練習して Read &amp; Look Up で明瞭に読み上げることができる</li> <li>簡単な短いスピーチであれば、キーワードのみで聞き手に目線を合わせて行うことができる。</li> </ul>	
6	中2	高1	informative speech		70%	Visual Aids (pictures)		Show & Tell などにおいて、写真などを使用して、準備されたスピーチを行うことができる。	
7	中3	高2			90%	smile/confident		聞き手に語りかけるよう目線を合わせ、自信をもってスピーチを行うことができる。	
8	高1	高3	speech plan	speech plan	90%	Visual Aids (chart/graph)	強調(要点をアピール)	表やグラフを使用し、要点や重要なポイントを強調し、印象に残るスピーチを行うことができる。	
9	高2	高3	persuasive speech	即興	90%		C+R+C	即興で与えられたテーマについて、その場で自分の意見をまとめ、理由を付け、主張することができる。	
10	高3	高3			90%		C+R+E+C	その場で与えられたテーマについて、その場で自分の意見、その根拠、また具体的な事例を挙げ、構成のしつかりした主張ができる。	

※ 上：ファストラーナー（習熟度の高い学習者） 下：スローラーナー（習熟度の低い学習者）

網掛け：各学年の到達目標

※ C+R+E+C: Claim(主張)+Reason(理由)+Evidence/Example(根拠/例示)+Conclusion(まとめ)

2 スピーキング (やり取り)

S(I)	上		下	activity	音声	イント ネー ション	length	つなが り	Fluency	Accuracy	社会言 語能力	Can-Do
0	小3 小4	～	小3 小4	挨拶	遅	△	1 往復	×				定型文を使用し、簡単な挨拶をすることができ る。
1	小5	～	小5	自分のことについての 質問に答える	遅	△	2, 3 往復	△				自分やごく身近なことに ついて、初歩的に 簡単な質問に答える ことができる。
2	小5	～	小6		遅	△	始めて 終わる	△				自分やごく身近な ことに ついて、会話を 始め、終わることが できる。
3	小6	～	中1	相手のことについて 質問する	普	△	2, 3 往復	△				相手やごく身近な ことに ついて、初歩的に 簡単な英語または 定型表現を使用し、 質問することが できる。
4	小6	～	中2		普	○	始めて 終わる	△				イントネーションも 意識しながら、相 手や自分のこと について、初歩 的に簡単な英語を 使用し、会話を できる。
5	中1	～	中3	相づちを入れなが らQA	普		40秒程 度	△				ある程度の時間、 基本的な表現を 使用し、会話を 続けることができる。
6	中2	～	高1	興味のあるテーマ で会話			40秒程 度	○				興味のある、ま たは身近なテーマ について、会話を 自然に続けること ができる。
7	中3	～	高2	与えられたテーマ で会話			40秒程 度	○				その場で与えら れたテーマについて、 会話を自然に 続けることができる。
8	高1	～	高3	ディベートQA					○	△		相手の主張に 対し、疑問や矛盾 など質問する、 またはそれに 答えることができる。
9	高2	～	高3	ディベート(反駁)					○	○		言語の正確性を 意識しつつ、論 点を整理しな がらやり取り ができる。
10	高3	～	高3	ディスカッション					◎	○		その場に応じた 言語を意識しな がら、意見を交 換し、結論を導 くことができる。

3 ライティング

W	上	下	語数/文数	構成	可読性	説得力	論理性	明瞭性	表現力			Can-Do
									正確	適切	オーセンティック	
1	小5	小5	Alphabet	-	文字	-	-	-	-	-	-	アルファベットの大文字・小文字を分かるように書くことができる。
2	小5	小6	語を書く 文を写す	-	語/文	-	-	-	-	-	-	音声として親しんだ短い語句や文を、語の区切りを意識して書くことができる。
3	小6	中1	1 sentence	-	句読点①	-	-	-	-	-	-	簡単な表現を用いて、短い単文を書くことができる。
4	小6	中2	2-3 short sentences	C	意見	×	-	簡単な接続詞	-	-	-	簡単な表現を用いて、自分の意見を2～3文の短い文で書くことができる。
5	中1	中3	4-5 short sentences	C+R	句読点②	△	理由	サインポスト①	△	△	△	自分の意見を理由を添えて、4～5文の短い文で書くことができる。
6	中2	高1	30 words	I-B-C	段落分け	△	△	サインポスト②	△	△	△	与えられたテーマについて、イントロダクション、ボディ、コンクルージョンの三つの段落構成で、30語程度のまとまった英文を書くことができる。
7	中3	高2	50 words	I-Bx3-C		△	意見/事実	段落整理	△	△	△	与えられたテーマについて、イントロダクション、三つのボディ、コンクルージョンの五つの段落構成で、50語程度のまとまった英文を、意見と事実、主観と客観を区別して書くことができる。
8	高1	高3	100 words	TS/SS CREC	句読点③	○	根拠		○	△	○	与えられたテーマについて、理由と具体的な根拠を示し、100語程度のまとまった英文を書くことができる。 トピックセンテンス、サポートセンテンスを意識した段落を書くことができる。
9	高2	高3	150 words			○			○	○	△	僅かな表現上の誤りはあるものの、自らテーマを設定し、150語程度のまとまった英文を書くことができる。
10	高3	高3	200 words			◎	◎	◎	◎	◎	○	自らテーマを設定し、表現上の誤りがほとんどなく、オーセンティシティについて意識した200語程度のまとまった英文を書くことができる。

4 リーディング / 5 リスニング

L	上	下	速度	Condition		Task	Car-Do
				長さ	難易度		
1	小5	小5	ゆっくりはつきり	挿影 簡単な指示	なし あり		なじみのある挿影や簡単な指示をゆっくりはつきりと話されれば、理解し応答できる。
2	小5	小6	↓	語句 定型表現	↓		ゆっくりはつきりと話されれば、初歩的な語句や定型表現を理解することができる。
3	小6	中1		単文			ゆっくりはつきりと話された単文であれば、内容を理解することができる。
4	小6	中2	聞き手に配慮	3文		おおよその内容	速度やポーズなど、聞き手に配慮して話された3文程度の対話や英文であれば、おおよその内容を理解することができる。
5	中1	中3	はつきり	5文	↓		はつきりと発音された5文程度の対話や英文であれば、おおよその内容を理解することができる。(高次入試)
6	中2	高1	↓				はつきりと発音された10文程度の対話や英文であれば、おおよその内容を理解することができる。
7	中3	高2	自然なスピード (WPM180)	10文		要点把握	自然なスピードで話される10文程度の対話や英文を聞き、要点を把握し内容を理解することができる。
8	高1	高3	↓	まとまった量	↓		自然なスピードで話されるある程度の長さの対話や英文を聞き、要点を把握しながら話し手の意図や主張を理解できる。
9	高2	高3		↓		意図・主張	自然なスピードで話されるある程度の長さの対話や英文を聞き、要点を把握しながら話し手の意図や主張を理解できる。
10	高3	高3		長い		↓	自然なスピードで話されるなじみがあまりない内容のまとまった文章や対話文であっても、要点を把握しながら話し手の意図や主張を理解できる。

R	上	下	クリティカル リーディング	読み取り	wpm	言語		Car-Do
						話数	lexile	
1	小5	小5	/	概要	-	-	-	簡単な短文章や対話文を読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
2	小5	小6	/	↓	-	-	-	平易なまとまりのある文章や対話文を読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
3	小6	中1	/		40	100		100Lの英文を40WPM程度の速度で読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
4	小6	中2	/		50	250		250Lの英文を50WPM程度の速度で読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
5	中1	中3	/		60	400		400Lの英文を60WPM程度の速度で読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
6	中2	高1	/		70	500		500Lの英文を70WPM程度の速度で読み、必要な情報を取り取り、概要や要点を正しく捉えることができる。
7	中3	高2	意図を正しく捉える	詳細	80	600		600Lの英文を80WPM程度の速度で読み、文章の詳細を理解し、筆者の意図を正しく捉えることができる。
8	高1	高3	主観/客観 意見/事実	↓	100	700		700Lの英文を100WPM程度の速度で読み、文章の詳細を理解し、読み取った内容について主観と客観、意見と事実を明確に区別することができる。
9	高2	高3	論理関係		120	900		900Lの英文を120WPM程度の速度で読み、文章の詳細を理解し、読み取った情報の論理的な関係を理解することができる。
10	高3	高3	批判的読解		150	1100		1100Lの英文を150WPM程度の速度で読み、文章の詳細を理解し、読み取った内容について批判的読解ができる。

↓：徐々に段階が進む

※Lexile 指数: Lexile 指数は、英語の読解力を客観的に測定するツールとして開発された指標で、英文に使用されている単語数や難易度、構文の複雑さなどを総合的に数値化したもの。本の場合はその難易度を、人であれば「読む力」を示す。指数は「0L」から10刻みに上がり、難解な専門書は「2000L」を超える。アメリカでは教育現場で幅広く活用されている他、世界165か国で使用されている。

【資料3 振り返りシート (Lesson 6)】

**YOURSELF**

項目	評価規準	○ / ×
構成	Intro – Body – Conclusion の形式になっている。[W-6 ~ 7]	
	Body が TS-SS1-SS 2 の形式になっている。[W-7 ~ 8]	
目線	メモばかり見ず，聞き手の顔を見て話すことができた。	
発声	大きな声ではっきりと話すことができた。	
VA	ビジュアルエイドを効果的に使うことができた。[S(P)-6]	
メモ	key word だけでがんばれた。	
表現	聞き手に伝わるような表現を心がけた。	
魅力	聞き手に魅力が伝わるよう工夫した。	

振り返り

- 1 自分でうまくできたと感じた点は？
  
- 2 自分でうまくできなかったと感じた点は？
  
- 3 次回がんばりたいことは？
  
- 4 本当は英語でこんなことを言いたかったのに！ということを書きましょう。

Class

No

Name

9 参考文献

- 『旧課程と現課程の中高英語教科書の難易度比較 ―中高6年間の教科書難易度の推移―』  
大田悦子 (2017)